

平成29年度

奈良県における  
障害のある人の  
舞台芸術に関する調査



# 奈良県における障害のある人の 舞台芸術活動に関する調査

## 目次

<b>I</b>	<b>概要</b>	<b>2</b>
1.	はじめに	2
1)	基礎情報	2
2)	県内で行われてきた障害のある人の舞台芸術活動の 代表的な事例(年代順)	3
3)	調査目的	3
4)	調査方法	4
2.	調査報告	7
1)	調査結果の概要	7
2)	調査の分析	12
3.	評価委員会での議論	14
1)	第一回評価委員会(2018年2月15日)	14
2)	第二回評価委員会(2018年3月1日)	14
<b>II</b>	<b>調査結果</b>	<b>20</b>
1.	アンケート調査	16
2.	訪問調査	24
1)	奈良県立ろう学校 演劇部	24
2)	社会福祉法人 在友会 障がい者支援施設 フレンズまきば	27
3)	社会福祉法人 大和郡山育成福祉会 ひかり園	30
4)	NPO法人 アゴラ音楽クラブ	33
5)	社会福祉法人 成美学寮 成美寮	36
6)	一般社団法人無限 放課後等デイサービス ワンピース	39
7)	劇団くらっぷ	43

# I

# 概要

## 1. はじめに

---

ここ数年、障害のある人の芸術活動に注目が集まっており、多くの展覧会やアートイベントが催され、それらのアート作品が広く紹介されている。障害のある人のアート活動の支援の重要性も説かれるようになり、現在では様々な団体、大学などが支援に関わる人材の育成などに取り組んでいる。私たち「障害とアートの相談室」は、過去3年間にわたり「障害者の芸術活動支援モデル事業」（厚労省）として、県内の障害のある人たちのアート活動の実態調査や、創作支援に携わる人材を育てるための研修、障害の有無を問わず誰もがアート活動に触れられる機会づくりなど、創作環境の整備や人材の育成といった面での障害のある人たちのアート活動の支援を行ってきた。

本年度より、支援モデル事業は「障害者の芸術文化活動普及支援事業」となり、その事業の規模が各都道府県へ広がったほか、支援されるアート活動のジャンルの一つとして、ダンスや音楽といった「舞台芸術」が明記された。これに伴い、私たちが奈良県での障害のある人たちの舞台芸術の支援をより積極的に行っていくべく、その第一歩として、本調査を行うことにした。

本調査において、舞台芸術活動を「音楽」、「ダンス」、「演劇」、「その他」の4つに大きく分類した。これは舞台芸術の範囲を明確にすることで調査の利便性を高めるとともに、「その他」においてジャンルに分けきれないような小さな活動（日課として行われている体操など）や、明確なジャンル分けが難しい取り組み（伝統芸能など）も調査の射程とすることを目的としている。

### 1) 基礎情報

奈良県における障害のある人の舞台芸術活動に関しては、市民団体による音楽祭などの催しを中心に、障害のある人たちが芸術活動に触れるような機会が多数設けられてきたことが、大きな特徴としてあげられる。これらの催しの多くは現在も継続して開催されており、本調査におけるアンケート、インタビュー調査の中でもこれらの催しに言及する発言は多く見られた。したがって、これらの催しのうち、代表的なものを次項にまとめる。

また、奈良市では1990年台より、行政の主導のもと、音楽療法士の育成や障害者福祉施設への派遣が行われてきた経緯があり、現在でも多くの施設で音楽療法のプログラムが行われていることも、地域的な特徴としてあげられる。この行政による音楽療法の支援事業は、奈良市社会福祉協議会によって継続されている。

また、上記のような催しや音楽療法の他にも、ダンスや演劇を含めユニークな舞台芸術活動を行っている複数の福祉施設や、団体、個人はいくつか存在しており、これらの個別の活動主体への聞き取り調査も行った。

## 2) 県内で行われてきた障害のある人の舞台芸術活動の代表的な事例（年代順）

### ① わたぼうしコンサート／わたぼうし音楽祭（主催：一般財団法人たんぽぽの家／奈良たんぽぽの会）

「わたぼうしコンサート」は奈良県の音楽グループ「奈良フォーク村」のメンバーによって1975年に始められた音楽会。障害のある人がつくった詩にメロディを付けて歌うことによって、社会の理解と共感を深めることを目標に、県内にとどまらず、全国各地で開催されている。

また1976年からは、奈良県だけではなく全国各地の障害のある人たちの詩にも光を当てることを目指し、「わたぼうし音楽祭」を毎年1回開催している。全国の障害のある人から詩を公募し、メロディをつけて歌う本音楽祭は、その後、世界から障害のある人やボランティアを招いて開催された「世界わたぼうし音楽祭」や、シンガポール、韓国、中国、タイ、オーストラリアなど、国外の複数都市で開催されてきた「アジアわたぼうし音楽祭」、「アジア・太平洋わたぼうし音楽祭」など、国際的にも広がりを見せた。

### ② わたぼうし語り部（主催：一般財団法人たんぽぽの家）

一般財団法人たんぽぽの家によって行われてきたパフォーマンス活動。障害のある人が語り部となり民話や創作の童話、自分史などを語る本活動は、1989年、俳優の故・沼田曜一氏を校長に「わたぼうし語り部学校」が開校されたことから始まった。現在では、合宿や通信講座の形式で障害のある人が語りのパフォーマンスを学ぶ「わたぼうし語り部塾」として継続して行われており、これらの講座の卒業生や受講生が、全国各地で語り部として活動を行っている。

### ③ 春咲きコンサート（共催：春咲きコンサート運営委員会、一般財団法人奈良市総合財団なら100年会館）

「福祉で街を創る・福祉で街おこし」をテーマに1997年より開催されてきた音楽祭。障害のある人、子供、お年寄りなど、様々な人が音楽で出会い、みんなでつくることを目標とした本コンサートには、県内の福祉施設内などで組織された音楽グループや、アーティストなど、様々な人が出演している。また、コンサートにあわせ、福祉施設で作られた商品などを販売するブースや、食品を販売する模擬店、福祉施設や学校から集められたアート作品を展示する「はるさき美術館」など、音楽以外にも多様な交流の場が設けられている。

### ④ 鹿の劇場（主催：奈良県）

奈良県が2011年より7年間に渡って実施した「奈良県障害者芸術祭HAPPY SPOT NARA」の一環として行われてきたイベント。障害のある人のパフォーマンスアーツを紹介することを目的に、ダンサーやミュージシャンといったアーティストを招いてのワークショップ・作品制作や、国内外の先進的なグループを招いての舞台公演を毎年行っていた。

## 3) 調査目的

障害とアートの相談室では、過去3年間の「障害者の芸術活動支援モデル事業」での調査事業により、県内の障害のある人の芸術活動に関する動向調査を継続して行ってきた。

前節の基礎情報で挙げたような音楽祭などは、その多くの活動が継続的に実施されており、その規模も大きいため、一定

の認知と理解が得られている。一方で、福祉施設内やサークル等の団体、及び個人が行っている舞台芸術活動に関しては、活動の実態が明らかにされていないという現状があった。

そこで本年度は、福祉施設や特別支援学校、サークルといった小規模な団体での活動を中心に、その実態の把握を目標とした調査を行った。

## 4) 調査方法

### ① 県内の障害者福祉施設および特別支援学校に向けたアンケート調査

#### ・内容

障害のある人の舞台芸術活動を行っているかを問う質問を始め、行っていると回答した団体に対してはその内容や頻度、現在の課題等、活動の全般的な把握を目的とした質問を、行っていないと回答した団体に対しては、機会があれば舞台芸術活動を行ってみたいと思うか、行おうとした際に何か課題があるか、といった意識調査の質問を設けた。

#### ・調査期間

2017年12月14日～2018年1月12日

#### ・対象

県内の障害者福祉施設および特別支援学校869件。奈良県が公開している福祉作業所のリストを参照に、障害者福祉施設をピックアップ（そのうち事業が重複している施設に関しては1つにまとめた）し、アンケート用紙を送付した。また、県内の全ての特別支援学校に対しても同様に送付した。

#### ・実施方法

各福祉施設へのアンケートの送付の他、障害とアートの相談室のウェブページ上での告知を行った。回答に関しては郵送、FAXでの返送の他、ウェブフォームからの入力によって受け付けた。

#### ・アンケート用紙

（アンケート用紙P6参照）

### ② 舞台芸術活動を行っている福祉施設、団体への訪問調査

#### ・内容

①のアンケート調査で積極的な舞台芸術活動を行っていることが確認できた団体や、その他、県内での舞台芸術を行っていることが知られている団体へたんぼの家より調査員が訪問し（一部の調査先には評価委員も同行）、その活動の見学や、詳細を聞き取るインタビュー調査を行った。

#### ・調査期間

2018年2月13日～3月10日

• 調査対象（調査を行った日程順）

- ①奈良県立ろう学校 演劇部（⇒p24～26）
- ②社会福祉法人 在友会 フレンズまきば（⇒p27～29）
- ③社会福祉法人 大和郡山育成福祉会 ひかり園（⇒p30～32）
- ④NPO法人 アゴラ音楽クラブ（⇒p33～35）
- ⑤社会福祉法人成美学寮 成美寮（⇒p36～38）
- ⑥一般社団法人 無限（⇒p39～42）
- ⑦劇団くらっぷ（⇒p43～45）

本アンケートは、「平成29年度障害者芸術文化活動普及支援事業」(厚生労働省)の一環として、一般財団法人たんぽぽの家が実施するものです。奈良県内で行われている、障害のある人の「舞台芸術活動(音楽やダンス、演劇など)」の調査を目的としています。また、本アンケートは事務局で集計したのち、本事業の報告冊子やウェブサイト等に掲載いたします。あらかじめご了承ください。

## ① 基本情報

団体名  
 記入者名(役職)  
 住所 〒 -  
 電話番号 FAX番号  
 メールアドレス  
 ※施設の場合は、下記にご回答ください。  
 サービス種別  
 利用定員 利用者数  
 障害種別の割合  
 利用者の年齢 歳～ 歳まで 職員数  
 法人設立、施設開所年  
 ※特別支援学校の場合は、下記にご回答ください。  
 定員 生徒数  
 障害種別の割合  
 職員数 学校設立年

1

## ② 障害のある人とのパフォーマンス活動について

現在、何かパフォーマンス活動(音楽やダンス、演劇など)を行っていますか。次の選択肢のうち、当てはまるものがあれば○をしてください。

- ・ 仕事として音楽やダンス、演劇などを行っている。
- ・ 余暇のプログラムとして音楽やダンス、演劇などを行っている。
- ・ 音楽療法など、ケアの一環として音楽やダンスを取り入れている。
- ・ クリスマス会など、施設内のイベントで、歌やお芝居などを行っている。
- ・ 放課後等デイサービスなどで、音楽やダンスを用いたプログラムを行っている。
- ・ 日課として、体操をしたたり歌を取ったりする時間がある。
- ・ 施設としては行っていないが、趣味として音楽やダンス、演劇などのパフォーマンス活動を行っている利用者がいる。
- ・ その他( )

続けて、下記のアンケートにご協力ください。

現在、パフォーマンス活動を行っている方は **A** にご回答ください。 現在、パフォーマンス活動を行っていない方は **B** にご回答ください。

## A③ 現在の取り組みについて

(1) 活動の基礎情報:どのような活動を、いつ、だれと、どこで行っていますか。

- ・ 活動の種類: 音楽・ダンス・演劇・その他( )
- ・ どこで: 施設内・外部の教室など・その他( )
- ・ いつ/どのくらい: 毎日・週に1回程度・月に1回程度・その他( )
- ・ だれと: 施設職員・ひとりで・家族・外部からの講師(アーティストなど)・その他( )
- ・ 何のために: 仕事として・レクリエーションのプログラムとして・サークル活動など、余暇のため・趣味のため・その他( )
- ・ 活動の内容を詳しくお教えてください( )
- ・ 活動を発表する機会がありますか。ある方は発表場所や頻度をお答えください( )

2

(2) 現在の活動に関して、課題に思っていることや、知りたいと思っていることはありますか。具体的にお聞かせください。

- ・ 場所について (例) 音楽やダンスの練習ができるスペースがない、など ( )
- ・ 人材について (例) 専門的な知識のあるスタッフがいない、など ( )
- ・ 資金について (例) 活動に必要な道具のための予算がない、など ( )
- ・ 情報について (例) 障害のある人のパフォーマンス活動について知る機会がもっと欲しい、など ( )
- ・ その他 ( )

## A④ その他

- ・ 自分たちの取り組み以外に、障害のある人のパフォーマンス公演を見たことがありますか。ある場合は具体的に教えてください。( )
- ・ 様々な課題について、解決のヒントになるような情報を得られるとしたら、どのような方法が良いですか。ウェブサイト・冊子・セミナー・研修会・ワークショップ・その他( )

## B③ 関心のある取り組みについて

(1) 機会があれば障害のある人とのパフォーマンス活動を行ってみたいと思いませんか。はい・いいえ

(2) どんなことをしてみたいですか。

.....  
 .....  
 .....

3

(3) パフォーマンス活動をはじめようと考えた時に、何か課題はありますか。

- ・ 場所について (例) 音楽やダンスの練習ができるスペースがない、など ( )
- ・ 人材について (例) 専門的な知識のあるスタッフがいない、など ( )
- ・ 資金について (例) 活動に必要な道具のための予算がない、など ( )
- ・ 情報について (例) 障害のある人のパフォーマンス活動について知る機会がもっと欲しい、など ( )
- ・ きっかけについて (例) そもそも何をどのように始めればよいか分からない、など ( )
- ・ その他 ( )

## B④ その他

- ・ これまでに障害のある人のパフォーマンス公演を見たことがありますか。ある場合は具体的に教えてください。( )
- ・ 様々な課題について、解決のヒントになるような情報を得られるとしたら、どのような方法が良いですか。ウェブサイト・冊子・セミナー・研修会・ワークショップ・その他( )

## ⑤ 奈良県の障害者芸術普及支援事業に期待することなど、ご自由にお書きください。

.....  
 .....  
 .....

ご協力ありがとうございました。

お問い合わせ・ご連絡先 〒630-8044 奈良市六条西 3-25-4 一般財団法人たんぽぽの家 URL: <http://artsoudan.tanpoponoye.org/>  
 TEL: 0742-43-7055 FAX: 0742-49-5501 E-mail: [artsoudan@popo.or.jp](mailto:artsoudan@popo.or.jp)

4

## 2. 調査報告

### 1) 調査結果の概要

アンケート、訪問調査の詳細に関しては次章で詳述するが、ここではその結果を概観するとともに、県内の障害のある人の舞台芸術の現状について考察する。

### ① 県内の障害者福祉施設および特別支援学校に向けたアンケート調査

アンケート配布数：869  
回答数（返却率）：39（4.48%）

#### 考 察

#### アンケートの回答率に関して

本アンケートの結果としてまず注目すべきはその有効回答率の低さである。以前、障害とアートの相談室の事業「奈良県における障害のある人の芸術文化活動に関する調査」（2014年度）において、主に美術分野を対象とした同様のアンケート調査を行った際も有効回答率12.1%と低い数値の回収率となったが、今回の調査においてはさらにそれを下回る結果となった。原因としては、以下のような要因が考えられる。

まず、これは2014年度の調査でも指摘されているが、本結果はまだまだ福祉の現場にアート活動が浸透していないことを示唆していると考えられる。また、前回の美術分野に関するアンケートよりもさらに回答率が下がったことを鑑みると、障害のある人の舞台芸術活動が美術造形活動以上に広がっていない可能性が考えられる。

しかし一方で、調査を進めるなかで「福祉施設では日常の業務が忙しく、アンケートに答えられるだけの時間的余裕がない」との現場の声も聞かれたため、実際には舞台芸術活動を行っているものの、アンケートには返信できなかったという団体も少なからず存在すると想定される。その他にも「そもそも、福祉施設等にとって、本アンケートに回答することに何の意義があるのかが明確ではなかったのではないか」という事務局としての反省もあり、障害のある人の舞台芸術活動の普及支援の意義について再考する必要があると考えられた。

また、その他にも「（音楽やダンスの活動を行っていたとしても）舞台芸術活動といえる活動なのかわからない」というような声も聞かれた。これは「舞台芸術」と呼ばれる芸術分野に含まれる活動が多様なため、自分たちの活動が舞台芸術に含まれるのかが分からないという事や、また、その活動の評価が難しく、例え音楽やダンスのレクリエーションを日常的に行っていたとしても、それを舞台芸術と判断しにくい事などが原因と考えられる。この「舞台芸術」というジャンルの定義や評価の方法に関しては今後も継続的に追求していきたい事柄である。

#### 舞台芸術活動を行っている団体からの回答

次に、回答されたアンケートにおいては、舞台芸術活動を行っている、との回答が約85%に達したことが注目される。無論、前述の通り本アンケートの有効回答率の低さを考えると、奈良県の実際の状況とはずれが生じることは十分考えられるものの、何らかの舞台芸術活動を行っている福祉施設、団体は少なくないという可能性が導かれるように思われる。

また、活動の内容においては、実施されている活動全体の約49%を音楽が占め、ダンス、演劇などの活動に比してかなり高い割合で実施されていることが分かる。また、活動の場所に関しては「施設内」が約63%を占め、活動の目的に関しては「レクリエーションのプログラムとして」が約49%を占めていることを考えると、これらの活動の多くが、ケアやレクリエーションを目的とした音楽活動であることが推測できる。これは前節の基礎調査で述べたような音楽療法の普及に関する奈良県の政策や、市民団体による音楽祭等の活動が影響を及ぼしている可能性が高いように思われる。

しかしその反面、障害のある人の舞台芸術活動を仕事として行っていると回答した団体は1施設にとどまり、また「活動を発表する機会はあるか」という設問に対して、「ある」と答えた団体は14団体（舞台芸術活動を行っている団体は約42%）しかないことを考えると、県内での障害のある人の舞台芸術活動の多くは、いわゆる舞台芸術（パフォーマンス作品）の制作を目指しておらず、また、それらの活動が障害のある人の賃金につながるような仕組みづくりはまだ整備されていないことが確認できる。

また、「だれと舞台芸術活動を実施しているか」という設問に対しては、「施設職員と」という回答が一番多く約39%を占め、前述の「活動を発表する機会はあるか」という設問に対して「ある」と答えた団体の詳細を見ると、その多くが施設の保護者への発表や法人・施設内のイベントでの発表という回答であり、これらの舞台芸術活動は、どちらかという外部に向けて発信していくためのものというよりも、自分たちの施設を中心に内部で行われている印象を受ける。また、活動の目的に関する設問への「その他」の回答に「身体ケア、コミュニケーション」や「ケア、表現の発信」という文言が見られることや、活動の内容に関する設問の回答を見ても、音楽療法やリトミック、ミュージックケアといったケアに関する活動が多く見られること、「体への負担や、体幹の維持を目的に毎朝仕事前に体操をしている。楽しくないと皆続かないので、楽しめるように行っている。」、「一人一人の特性に合わせた楽器、発声、身体表現を一緒に発見し、それらが調和して一つの表現になることを体験する。」という回答が見られることから考えても、これらの活動の多くが、いわゆる舞台芸術（パフォーマンス作品）の制作を目的としたものではなく、施設内で、日々の生活を豊かにしたり、障害のある人のケアをしたりするために行われていることが確認できる。

## 舞台芸術活動を行う上での課題

次に、現在どのような課題を抱えているか、という設問に対しては、もっとも多かった回答が人材の不足に関する課題で、次いで活動を行う場所に関する課題、次に予算に関する課題と情報に関する課題であった。

これらの課題のうち、特に人材、予算に関する課題は2014年度の調査においても指摘されていた問題であり、舞台芸術に限らず、県内の障害のある人のアート活動全般に関する構造的課題が残っていることが確認できた。特に人材的な課題に関しては「専門的なスタッフが少ない」といった回答や、「活動を主体的に行えるスタッフがいない」、といった回答が見られ、障害のある人との舞台芸術活動を引っ張っていくような人材の必要性が感じられた。

一方で、場所に関する課題に関しては一見すると回答数は多いものの、その回答内容を見ると「もっと広いスペースがあれば今よりも活動の内容が広がるのではと考えている。」、「各保育園や幼稚園、子育てひろばなどに行って、行いたい」、「施設外の自然の中などで活動してみたい。」といった、活動をさらに展開させていきたいことを示すような回答が目立ったことが特徴としてあげられるように思う。

## 舞台芸術活動を行っていない団体からの回答

次に、活動を行っていないと回答した団体について考察する。行っていない団体はアンケートの全回答数の約18%と低い数値ではあるものの、繰り返しになるが、本アンケートの回答率を鑑みるに、これがどれほど実態を反映しているかは不明である。

しかし、少なくとも本6件の回答の内、「機会があれば障害のある人とのパフォーマンス活動を行ってみたいと思うか」という設問に対しては、4件が「はい」と回答しており、舞台芸術活動への関心自体は必ずしも低くない。また、「もし活動をはじめようと思った時に何か課題はあるか」という設問に対しては、舞台芸術活動を行っている団体と同様、専門的な知識を持ったスタッフの不在をあげる回答が目立った。

### その他の設問への回答

活動を行っている、いない団体双方からの回答として「障害のある人のパフォーマンス公演を見たことがあるか」という設問に対しては、様々な催しがあげられたが、その中でも「わたぼうし（音楽祭・コンサート）」、「春咲きコンサート」等、前節の基礎情報で紹介した催しが多数含まれており、奈良県では市民団体による音楽祭などの催しを中心に、障害のある人たちがパフォーマンスに触れるような機会が多数設けられてきたという説を裏付ける結果が得られたように思う。

また、「奈良県の障害者芸術普及支援事業に期待すること」に関する設問へは「障害のある無しに関わらず、誰もが芸術活動に参加できる機会を創出してほしい」、「公演、発表の機会を増やしてほしい」といった意見が多く寄せられたほか、「各事業所で行っている活動を集めるような機会がほしい」、「市内外の地域とのネットワークや、いろいろな施設と協力あって活動が進めばと思っている」といった、芸術活動に関わるネットワークの整備を期待するような意見が見られた。

### アンケート調査を通じて

最後に、アンケートの結果全体を見るに、概して、障害のある人の舞台芸術活動に関する各福祉施設や団体の興味関心は、決して低いものではないことがうかがえる。しかし、芸術活動を担う人材の不足や、活動に触れたり、発表する機会の不足、活動を行っている人間のネットワークの不備など、以前の調査から指摘されてきたようなアート活動全般に関わる課題は未だ残っていることがうかがえる。またなにより、今回の調査はその回答率の低さから、県内の障害のある人の舞台芸術活動の実態を明らかにするには情報が足りないため、継続した調査活動が必要となるだろう。

## ② 舞台芸術活動を行っている福祉施設、団体への訪問調査

---

調査件数：7団体

ここでは調査先の団体の概要と、調査を通じて感じられた事象に関して、簡潔にまとめる。

本調査は前節で説明の通り、①のアンケート調査に回答のあった団体のうち、積極的な活動を行っていることが確認できた団体や、その他、もともと舞台芸術活動を行っていることを事務局で把握していた団体を対象に実施した。以下に調査を行った7団体の概要をまとめる。

---

### 訪問調査の結果概要

---

#### ① 奈良県立ろう学校 演劇部

- 団体の種類：特別支援学校
- 所在地：大和郡山市
- 活動メンバー：ろう学校の生徒
- 活動ジャンル：音楽
- 内容：学校の部活動として演劇活動を行っている。

#### ② 社会福祉法人 在友会 障がい者支援施設 フレンズまきば

- 団体の種類：福祉施設（施設入所支援、生活介護）
- 活動メンバー：施設の入所者
- 活動ジャンル：音楽
- 内容：外部の講師を招き、音楽療法を行っている。

#### ③ 社会福祉法人 大和郡山育成福祉会 ひかり園

- 団体の種類：福祉施設（生活介護、就労継続支援B型、就労移行支援）
- 活動メンバー：施設の利用者
- 活動ジャンル：音楽
- 内容：外部の講師の指導のもと、ひかり園のなかで結成された「ひかり園音楽隊」として、主に合唱の活動を行っている。

#### ④ NPO法人アゴラ音楽クラブ（アゴラ太鼓）

- 団体の種類：認定NPO法人
- 活動メンバー：音楽クラブに参加している、障害のある人たち
- 活動ジャンル：音楽
- 内容：アゴラ音楽クラブ自体は障害のある人のための音楽教室。ピアノ、マリンバ、和太鼓のレッスンを行っており、外部から、たくさんの障害のある人たちが通っている。本調査では特に太古の活動である「アゴラ太鼓」の活動を中心に取材を行った。

#### ⑤ 社会福祉法人成美学寮 成美寮

- 団体の種類：福祉施設（生活介護、施設入所支援）

- 活動メンバー：施設の入所者
- 活動ジャンル：演劇
- 内容：施設職員の主導のもと、入所者と演劇をつくり、毎年の施設のお祭りで発表している。

⑥ 一般社団法人 無限 放課後等デイサービス ワンピース

- 団体の種類：福祉施設（放課後等デイサービス）
- 活動メンバー：施設の利用者
- 活動ジャンル：ダンス
- 内容：外部より講師を招き、ダンスクラスを開催している。

⑦ 劇団くらっぶ

- 団体の種類：劇団
- 活動メンバー：有志で集まった県内の障害のある人たち
- 活動ジャンル：演劇
- 内容：一人の演出家を中心に劇団員が集まり結成された劇団。定期的に作品発表を行っている。

考 察

「キーパーソン」の存在について

これらの団体への調査を通じてまず初めに明らかになったのは、どの団体にも、その活動を中心になって引っ張っている「キーパーソン」が存在することだった。例えば、①のろう学校においては、14年前、本校に勤めていた美術教師である綿井先生が中心となって演劇部を立ち上げ、現在も同部の顧問として活動を引っ張っている。また、例えば、④のアゴラ音楽クラブにおいては、代表である水野氏が30年前にたまたま奈良市で音楽教室を開いた事をきっかけに音楽に興味のある障害のある児童が集まるようになり、その後、様々な変遷を経ながら団体をNPO化、現在も精力的に音楽活動を行っている。また、一方で、例えば⑤の成美寮においては、現在勤めているスタッフもいつから始まったか知らないほどの以前より、生活発表会の催しとして演劇活動が行われてきたが、現在も、担当スタッフを毎年入れ替えながら脈々と引き継がれている。このように、県内で行われてきている舞台芸術活動には、熱意を持ってその活動を立ち上げ、今まで引き継いできた人たちの存在が欠かせないものだということが感じられた。そのため、聞き取り調査においても、活動の具体的な内容を調査するのみでなく、活動の歴史や、それら「キーパーソン」の想いを聞き取ることに注力し、障害のある人の舞台芸術活動の意義や、それを継続していくためのヒントに迫れるよう心がけた。

舞台芸術活動を行うねらいについて

また、調査のなかでほとんどの団体から聞かれたのが、舞台芸術活動を通じて、障害のある人たちが変わってきた、という感想であった。例えば、②のフレンズまきばでは、それまではどちらかというと攻撃的で、コミュニケーションの難しかった利用者が、音楽療法を通じて笑顔を見せるようになり、施設職員が驚いたという声が聞かれ、また、例えば⑥無限では、はじめダンスの教室を始めた頃は、参加者が集中できず、おしゃべりが続いてしまっていたような時期もあったが、現在では、皆が集中するようになり、より積極的にダンスの活動を行えているという。また、活動の目的に関しても、①のろう学校では、演劇の経験を通じて生徒たちが自己表現をできるようになったり、自己肯定感を持てるようになってほしいとの思いが聞かれたり、④のアゴラ音楽クラブでは、音楽を通じて他者とのコミュニケーション能力を育ててもらいたいとの思いが聞かれるなど、舞台芸術活動を通して、他者と交流する力が生まれることを主たる目的としているように感じた。

## 活動の発表について

また、もう一つ特徴的であったのは多くの団体が外部に向けて自分たちの活動を公開していくことに意欲的だということだった。例えば、①のろう学校では、地域の催しで作品を上演したり、高校演劇や手話パフォーマンスのコンクールに参加するなど、盛んに発表活動を行っている。③のひかり園音楽隊は、毎年同施設が主催で開催している大きな音楽祭「輝コンサート（ひかるコンサート）」を中心に、その他地域の音楽祭などに積極的に参加し、地域のなかでその存在を広く知られている。また、⑤の成美寮では、前出の2団体に比べるとその規模は小さいものの、毎年4月に開催する施設のお祭り「花まつり」で利用者の保護者や地域の人たちに向けて演劇を上演することで、施設が地域と交流する重要な機会を作り出している。また、⑦の劇団くらっぴに関しては、自主公演を行ったり、県内外の演劇祭に参加するなど、公演活動を盛んに行っている。また、⑥の無限のダンス教室は、今は年に1度の施設の発表会への出演を行っているが、今後はその活動を外部に向けて発信していきたいという。このように、県内で舞台芸術活動を行っている団体の多くは、外部への発信を念頭において活動しており、またその活動によって、障害のある人や福祉施設を外部に開き地域との接点を生み出している側面があることが分かった。

また、最後に少し触れておきたいのは、本調査を始めるにあたり、調査の依頼をしたところ、その段階で辞退される施設がいくつかあったことだ。その理由としては「活動の担当者が変わり、今はまだ外部に見せられない状態のため」であったり、「メンバーの重度化が進み、活動を継続できなくなったため」といった色々な活動の実状があった。ここに障害のある人たちのアート活動を継続していくことの難しさを垣間見たように思う。

## 2) 調査の分析

### 舞台芸術の力

アンケート調査、訪問調査のどちらでも、それぞれの団体が舞台芸術活動を行っている狙いとしては「コミュニケーション」、「自己表現」といったキーワードがあげられた。また、訪問調査の中でも、舞台芸術活動を通じて障害のある人の他者との接し方が変わってきた、というような声が多数聞かれた。これらは、舞台芸術の取り組みが、障害のある人たちのコミュニケーションの促進といったような形で働く可能性を示しているのではないだろうか。また、こちらは訪問調査の中で聞かれたものだが、舞台芸術の発表が、地域との接点が生まれる場づくりとなっているという意見もあった。これは舞台芸術が、障害のある人や福祉施設を外部に向けて開いていくきっかけづくりとして働く可能性を示しているように考えられる。このような多様なコミュニケーション（参加している人達同士のコミュニケーション／障害のある人や、福祉施設と外部とのコミュニケーション）が生まれる要因は舞台芸術のありかたそのものにあるのかもしれない。

舞台芸術はそのジャンルを問わず、音楽であれ、ダンスであれ、多くの場合、その活動においては周囲の人と協働し、経験を共有することができるスタイルの芸術であるため、その活動を通じて、自然と他者とのコミュニケーションが構築されていく。また舞台芸術は、その発表の場においては、プレイヤーだけでなく観客の存在が必要であり、その二者の間に存在する芸術形態であるため、こちらも観客＝外部とのチャンネルが自然と開かれていく。またなにより、舞台芸術の大きな特徴として、絵画や造形といった美術活動と異なり、プレイヤーの身体そのものが表現を行うという点があげられる。これにより、より直接的にアーティスト本人の魅力や存在感を観客に伝えられるため、積極的なコミュニケーションを生み出す力があるのではないだろうか。

### 支援を行う人材の重要性

次に、両調査の結果として特徴的だったのは人材に関する事象である。アンケート調査のなかでは、専門的な人材や、積極的に活動に関わる人材の不足を課題としてあげる回答が多く見受けられた。また一方で、訪問調査においては、障害のある人の舞台芸術を力強く引っ張る「キーパーソン」の存在が示唆された。以上の結果からは、障害のある人の芸術活動を実施し、継続していくには、専門的な知識を持ち、活動を主体的に担っていく人材の必要性が示されているように思われる。前

述したように、この人材の不足に関しては、以前の障害とアートの相談室の調査においても指摘された課題点であり、舞台芸術分野のみならず、障害のある人のアート活動全般にいえる特徴であろう。このような現状を改善していくためには、新たな人材を育てていくことはもちろんであるが、誰もがアート活動に気軽に参加できる機会の創出や、アーティストを福祉施設に派遣するシステムの構築、専門的な知識がなくてもアート活動を始められるためのメソッドづくりなど、多様なアプローチが考えられる。

### ネットワークの構築について

また、両調査を通じて感じられたのは、それぞれの団体をつなぐネットワークの不足である。アンケート調査のなかでは、舞台芸術を行っている団体のうち、発表の機会を持っている団体は半数以下であった。また、「各事業所で行っている活動を集めるような機会がほしい」、「市内外の地域とのネットワークや、いろいろな施設と協力しあって活動が進めばと思っている」といった他団体との交流を望むような意見も聞かれた。一方で訪問調査を行った団体については、その全てが自分たちの発表の機会を持ち、積極的に公演を行っているが、それらの多くは各団体の単独での公演であり、他の団体と協働しての公演の機会に関してはあまりないようだった。そこで、奈良県における舞台芸術活動の普及支援においては、様々な団体の舞台芸術が出会えるような公演づくりや、実践者間のネットワークづくりが求められているのではないかと考えられる。

### 「舞台芸術活動」というジャンルについて

最後に、両調査を見て、概して感じられるのはやはり舞台芸術という芸術分野の幅の広さである。例えば、一口に音楽と言っても余暇のプログラムとしての音楽から、音楽療法やミュージックケアといった療法のための音楽、舞台公演を前提とした、いわゆるパフォーマンスとしての音楽など、多様なスタイルの音楽が含まれる。これらの音楽はその目的や支援の方法もそれぞれに異なるだろう。今後、舞台芸術分野の普及支援を行っていくには、それらのうちのどのような形式の芸術に特にフォーカスし、効果的な事業を展開していくのかが問われるように思われる。

### 3. 評価委員会での議論

本年度の事業においては、本調査事業に並行し、評価委員会を開催。障害のある人の舞台芸術の意義や、その評価についての議論が交わされた。本節では、それらの議論を抜粋して紹介する。

#### 【評価委員】

岡崎 潤（デザイナー、造形教室主宰）      沼田 里衣（大阪市立大学テニユアトラック特任准教授）  
中川 真（大阪市立大学特任教授）      横堀 ふみ（NPO 法人 DANCE BOX スタッフ）

#### 1) 第一回評価委員会（2018年2月15日）

第一回的评价委員においては、アートの評価に関する議論が中心となった。現在、障害のある人のものに限らず、アート界全体で「評価」ということが大きなファクターになりつつある。評価は、ただ作品の良し悪しをはかるものさしとしてだけではなく、アートを社会に積極的に提示し、その価値を広く伝えていくために必要とされている。このような状況にある今だからこそ、障害のある人のアートも含めた、幅広い視座での評価基準や評価軸を打ち出していくことが求められている。本事業においても、県内で行われている個々の舞台芸術活動の取り組みに対して評価をしていくことも必要だが、同時に、どのような評価の可能性があるのか、評価の概念を押し広げるような議論を深めていくことも重要になるのではないだろうか。

また「評価をする」となると、作品主義（作品の完成度、といったような表面的な部分のみを評価してしまうような考え方）に陥りがちになってしまうことに気をつけなければならない。実際に障害のある人の舞台芸術活動が行われている現場に行くと、そこで活動を行っている人達が、どのような思いを持って障害のある人と接しているか、といった、活動の内容ではない部分にも学ぶべきところがあるように感じる。こういった多面的な様相を評価していくためには、活動の具体的な内容を調査するだけでなく、調査員個々人が感じた事柄を拾い上げたり、それぞれの団体での取り組みに対する自己評価を聞き取ったりする、といったような、様々なアプローチでの調査を行っていく必要があるだろう。

#### 2) 第二回評価委員会（2018年3月1日）

第二回的评价委員会においては、県内の事業所や団体を対象に行った舞台芸術に関するアンケート調査や、訪問調査の結果を報告し、どういった評価のあり方が考えられるのか議論した。訪問調査を実施して、それぞれの活動団体が個々の目標や思いをもって取り組んでいるということが分かった。活動の評価には、団体内部での評価軸や、それを外部から見た時の評価軸など、多様なレイヤーが存在するが、見落としは避けられないのが、評価をすることで何を指すのか、ということだ。前述のように、評価は単にアートをはかるものさしではない。評価を通して、こういった別の見方もある、というようなオルタナティブを示すことにより、活動に参加できる人が増えたり、現場の充実につなげていくことができるのではないだろうか。

また、今回の訪問調査では、各活動にキーパーソンとなる人物がおり、属人的とも言える活動が少なくなかった。そうした活動について普遍的な評価を示すことは容易ではない。しかし、個性をもったキーパーソンと参加者をつなぐ、コーディネーターの存在の有無などマネジメントの視点で見ると、ひとつの評価は可能であろう。また、活動そのものについても、手法やキャラクターは独自のものであっても、なぜその活動に取り組んでいるのかという問題意識などは、他団体の活

動にも大いに参考になると考えられる。

最後に、アート活動に関わる際の主体性についても考えておきたい。舞台芸術に限った話ではないかもしれないが、今回の調査では、少なからず「教える－教えられる」という関係性が存在する活動も多かった。もちろん、そうした関係を参加者自身が望んでいる場合や、この関係性が状況によって反転する場合もある。しかし、障害のある人が芸術文化を担う主体性について考える時には、そうした関係性のなかで、アートや表現がどのように共有されているか、という点を注視していくことが肝要になってくるだろう。

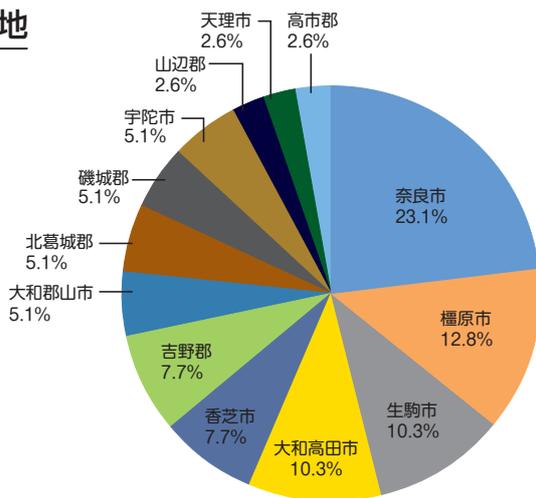


# 調査結果

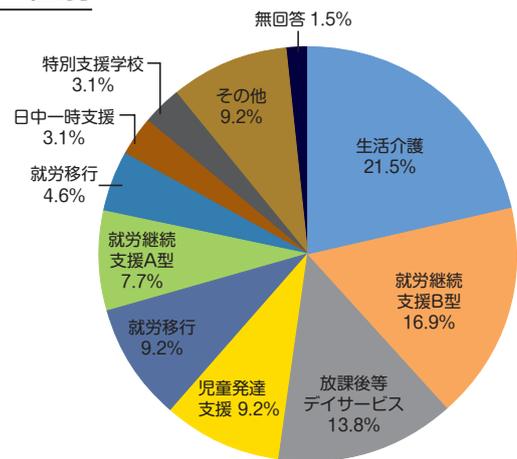
## 1. アンケート調査

### ① 基本情報

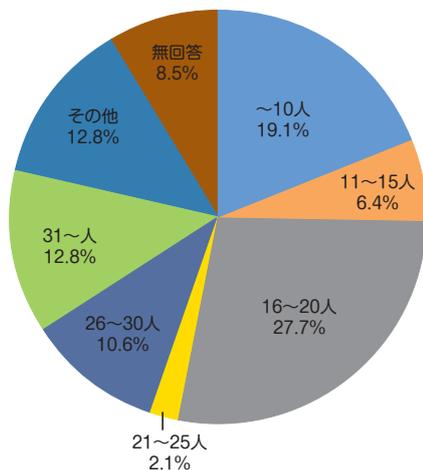
#### ① 所在地



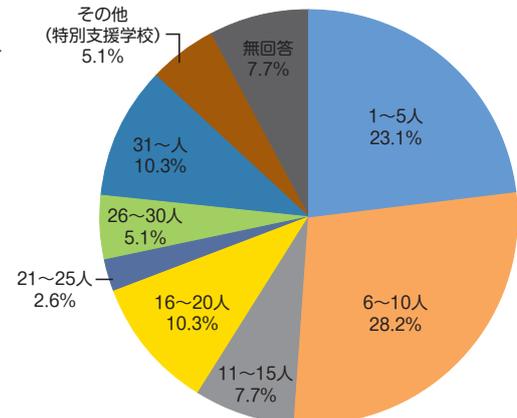
#### ② サービス種別



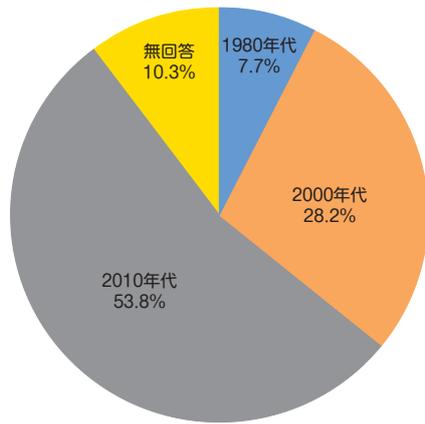
#### ③ 利用定員



#### ⑤ 職員数

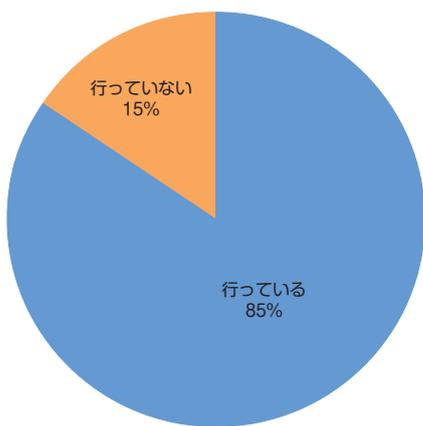


⑥ 施設開所年

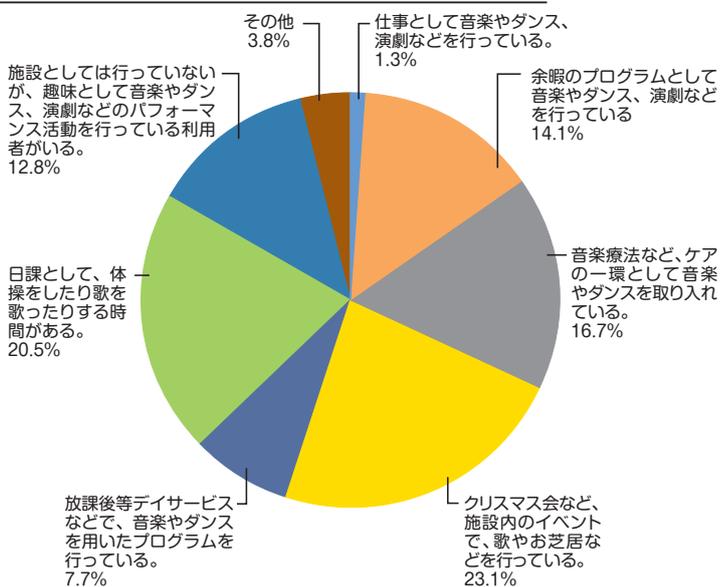


② 障害のある人とのパフォーマンス活動に関して

① 現在、何かパフォーマンス活動（音楽やダンス、演劇など）を行っていますか。



② どのような活動を行っていますか。



**その他の回答（抜粋）**

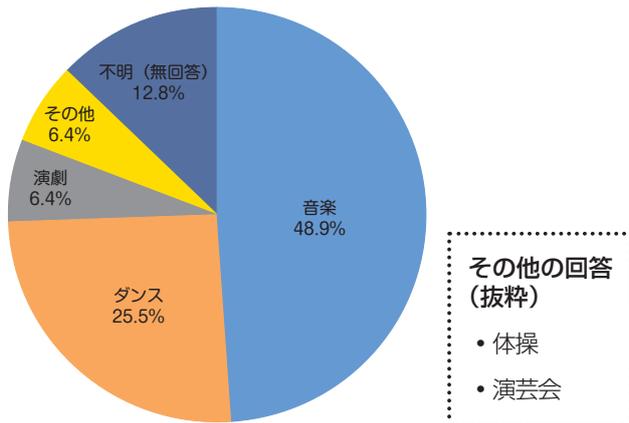
- 文化祭として、音楽や劇や体育的な内容で学習活動発表している
- 低年齢の集団のため、音楽あそび、リズムあそびという形で行っている
- 「春咲きコンサート」への出演

## ① 現在、パフォーマンス活動を行っている方の回答

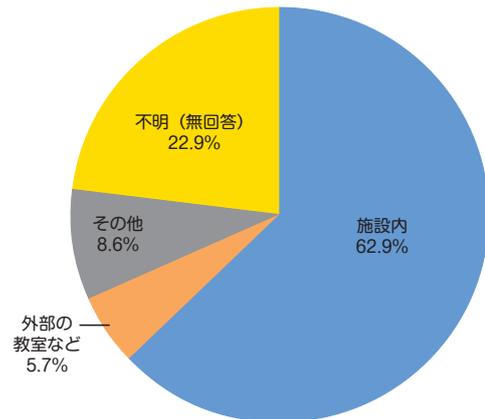
### ③ 現在の取り組みについて

#### 1) 活動の基礎情報：どのような活動を、いつ、だれと、どこで行っています

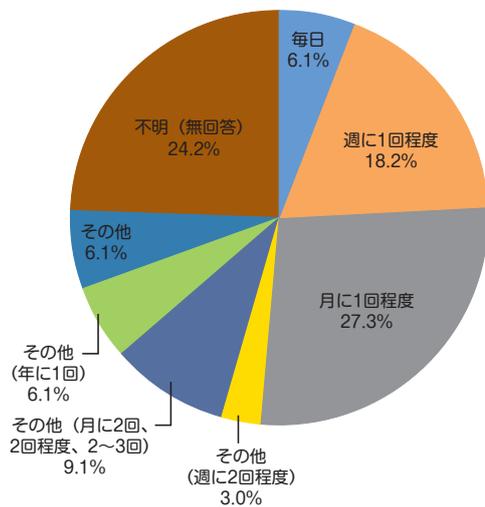
##### ① 活動の種類



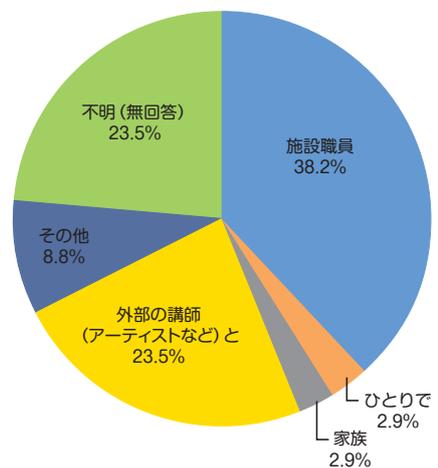
##### ② どこで



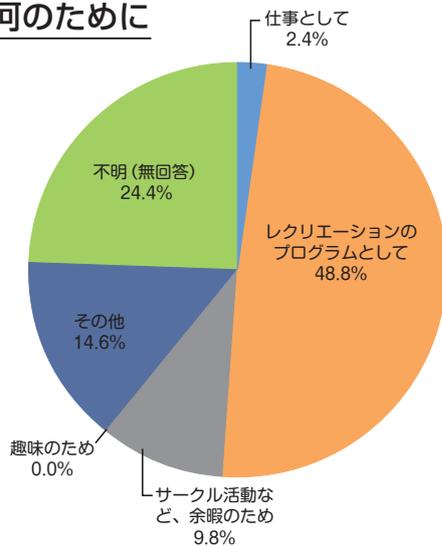
##### ③ いつ／どのくらい



##### ④ だれと



⑤ 何のために



その他の回答(抜粋)

- 身体ケア、コミュニケーション
- 表現の発信
- 運動として
- 現在は主に、学びのプログラムとして行っていますが、将来的に仕事につなげられるような要素を作りたいと考えています。

⑥ 活動の内容を詳しくお教えてください

- 毎週金曜日にクラブ活動として
- 行事の中で劇をしている。
- 「音が聞こえたら動く」「音がなければ止まる」など身体の動きの中で「即時反応力」を養う。手あそび、季節の歌、本の読み聞かせ、手作り楽器などを作って楽しむ。
- 施設職員の指導により毎朝行っている。又月2回外部講師の指導により3B体操を行っている。
- 月1回、外部講師を迎え入れ音楽療法、フラダンス教室を生活介護、日中活動に取り入れている。
- 授業として音楽の時間、体育の時間が設定されている
- 職員が考えた創作ダンスを利用者さんと踊る。楽器を使う。季節の歌を歌う。
- 音楽に合わせた発声やダンスなど
- リフレッシュメニューとして、月1回音レク(ソーラン節、太鼓演奏)とエアロビを実施。ともに外部講師が行います。
- 演奏会:それぞれやりたい演目を披露する(歌、演奏、コント、落語、自作動画)
- 手あそび、リズムを中心に、静と動の動きを取り入れている
- ギター、キーボード、打楽器などの持ちよりで、バンド活動を年2回位している。
- 歌、楽器演奏
- ミュージックケア、音楽療法
- リトミック、合唱、リズム打ち、楽器演奏
- フラダンス、歌、楽器
- 体への負担や、体幹の維持を目的に毎朝仕事前に体操をしている。楽しくないと皆続かないので、楽しめるように行っている。
- 一人一人の特性に合わせた楽器、発声、身体表現を一緒に発見し、それらが調和して一つの表現になることを体験する。
- ○ダンスWS:身体をほぐし、ペアもしくはグループに分かれて、ダンスの振り付け(ダンスシーン)をそれぞれで考えて、お互いに発表しあったり、ダンスシーンを組み合わせたりしている。○歌のWS:ストレッチ、発声練習を行い、季節に合わせた歌を皆で歌う。最近では、一緒に歌う人の歌声を聞き、合わせたり、ずらしたりすることに挑戦している。今後は、曲を作ったりし、発表する機会を持ちたいと考えている。
- 音楽:高齢のメンバーを中心に余暇的に70年代ソングをボランティアの方を招いて月に一程度
- ダンス:月2回講師の方に来ていただき、ガムランを使って即興のダンスをメンバー(利用者)さん6名程度で開催。演劇:シアターゲームをもとに作劇に取り組んでいる。メンバー(利用者)10名

## ⑦ 活動を発表する機会はありますか。ある方は発表場所や頻度をお答えください。

- 施設のイベント、他施設での発表、年に数回
- 劇を、保護者や施設関係者（役員等）に鑑賞してもらう
- 施設で行うクリスマス会で発表している。
- 年に1度（秋）本校体育館にて、午前中は商学部、中学部交互に各年開催。午後、高1、高3の発表
- 音楽発表会や運動会
- 音楽・ダンスプログラムの日に発表。月に3～4回程度。
- 音レクについては、アゴラ発表会での演奏、まつりでの演奏を行った。
- 年に5回。生駒市のゆめリサイタル、ららまつりなど、法人内演奏会
- 年2回ほどの施設内でのイベント、年1～2回の外部のイベント。
- 演劇は年1度施設内での発表。ダンスはWSや、セミナーなどでの報告。

## 2) 現在の活動に関して、課題に思っていることや、知りたいと思っていることはありますか。具体的にお聞かせください。

### ① 場所について

- 活動室でおこなっているが、もっと広いスペースがあれば今よりも活動の内容が広がるのでは！？と考えている。
- 児童は生徒数の増加により、発表学年に制限ができたり、保護者以外に原則非公開になっている。（客席に入りきらないため）
- 食堂のテーブルや椅子を片付けて、場所を確保している。希望者が多いため、余裕は無いです。
- 今は施設にて行っているが、各保育園や幼稚園、子育てひろばなどに行き、行いたい
- ダンス部の方は鏡がないので、少し不便を感じています。
- 施設外の自然の中などで活動してみたい。

### ② 人材について

- 主体的に行える職員がいない。
- スタッフが利用者さんと声をかけいっしょになって楽しく活動することによって最初できなかった事ができるようになる、協力的なスタッフがそろっている。
- 教員の配置転換で毎年変化がある。
- 現状としてインターネット等の情報を見て独学で行っているため、私達自身勉強が必要。
- 専門的な知識のあるスタッフがいない。
- 定期的に外部講師の派遣について。
- 一緒に興味を持って取り組んでくれるスタッフがほしい。美術や身体表現の専門的なスタッフがほしい。
- 具体的な公演を行うとき、ケアが必要で人員がほしい（ボランティア）。

### ③ 資金について

- 楽器の取り合いになることがありもう少し予算があればと思う。
- 予算が少ない中、取り組んでいる。
- 県からの予算等である程度しぼりがある。
- 楽器（ドラムセット）が欲しい。

### ④ 情報について

- 教員の研修の機会として情報があれば
- 情報を仕入れても、利用者への広報はできるが、取り入れるのにはハードルが高い（事業計画の反映など）
- 内容などの研修の機会が知りたい
- 障害のある人のパフォーマンス活動について知る機会が欲しい

### ⑤ その他

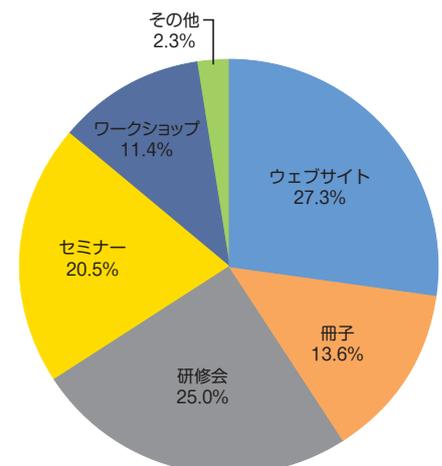
- 利用者の方の参加意欲の低下
- 現在行っている音楽活動はあくまで講師の型に合わせる（模倣）のスタイルであり、自由な表現を引き出すプログラムがない。また、日々「仕事」のプログラムで組み立てをしているグループが多く、日常的にパフォーマンスを取り入れる仕組みが無い。
- コーラスのやっている所が知りたい

## A ③ その他

### ① 自分たちの取り組み以外に、障害のある人のパフォーマンス公演を見たことがありますか。ある場合は具体的に教えてください。

- |                         |                   |
|-------------------------|-------------------|
| • 奈良県障害者芸術祭、アメニティーフォーラム | • BIG-I、わたぼうし など  |
| • 春先コンサート               | • 鹿の劇場、ちんどんなど     |
| • 青葉仁会のダンス（イベントとして）     | • 高等養護学校のだんす、和だいこ |
| • 文化祭などで歌やダンスの発表、和太鼓演奏  | • 和太鼓の演奏          |
| • 育成会 本人の会のダンス          | • 車いすダンス          |
| • ソーラン節                 |                   |

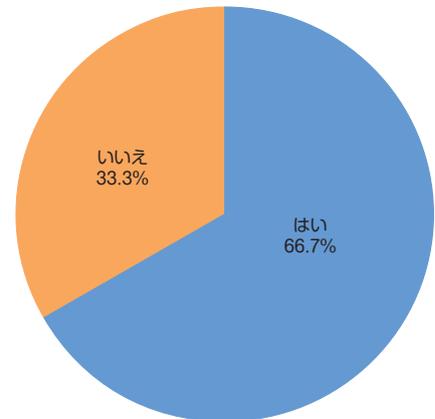
### ② 様々な課題について、解決のヒントになるような情報を得られるとしたら、どのような方法が良いですか。



## ② 現在パフォーマンスを行っていない方の回答

### ③ 関心のある取り組みについて

1) 機会があれば障害のある人とのパフォーマンス活動を行ってみたいと思いますか。



2) どんなことをしてみたいですか。

- 音楽会、合唱、詩の朗読
- わからない
- 当会利用の子ども達の年齢が低い為に、具体的にどのような活動かという希望はありません。
- 当然なのですが、仕事しか提供していないので、クラブ活動のようなものとしてサービス以外のところで発散したり、リラックスできる活動を作りたい。

3) パフォーマンス活動をはじめようと考えた時に、何か課題はありますか。

#### ① 場所について

(回答なし)

#### ② 人材について

- 専門的なスタッフ不足。

#### ③ 資金について

(回答なし)

#### ④ 情報について

- パフォーマンスを見る機会があまりない

#### ⑤ きっかけについて

- 利用者に積極的にやりたい人がいない。
- そもそも何をどのように始めればよいか分からない。

#### ⑥ その他

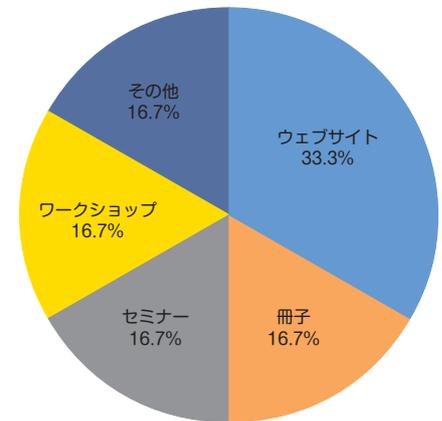
(回答なし)

## B4 その他

① これまでに障害のある人のパフォーマンス公演を見たことがありますか。ある場合は具体的に教えてください。

・TVしかないように思います。

② 様々な課題について、解決のヒントになるような情報を得られるとしたら、どのような方法が良いですか。



⑤ 奈良県の障害者芸術普及支援事業に期待することなど、ご自由にお書きください。

- ・公演の機会は継続しながら、各事業所で行っている芸術活動をより一層広めるための特集機会を作って頂ければと思います。
- ・毎年継続的に行ってほしい！
- ・発表する場を増やす。
- ・障害をもつ人たちにも、それぞれ可能性があることから、一人でも多くの方たちの才能を開花させるきっかけを提供して欲しいです。
- ・力を持っている当事者の方はたくさんおられると思いますが、それを見抜けなかったり活かすことが苦手な支援者も多いと思いますので、そこも育つといいと思います。
- ・障害をお持ちの方の芸術活動が仕事として、もしくは日常を豊かにするものとして、施設が取り入れようとした時、必要性を感じるレベルに温度差がある。
- ・今回のアンケートなど、より具体的で視覚化されたデータをもとに、きっかけや動機を生み出していくことが必要だと思います。心を動かすためには、データに加えて、ワークショップなどの体験が重要だと思うので、そういった協働のイベント等、呼びかけていただけたら嬉しいです。
- ・すべての方の活躍の場が広がっていけば良いなと思います。障がいのあるなしに関わらず、誰もが参加できる取り組みに期待しています。
- ・芸術活動を通じて、地域の活性化や地域との交流を深められることを期待します。
- ・又、市内だけでなく都市部以外の地域のネットワーク、色んな施設や地域と協力した活動が進めばと思います。
- ・障害者の表現の場としても大切だと思いますが、障害者の中には金銭的に音楽を直接聞けるような場に行けることがなかなかないので、ボランティアの方でも良いので、コンサートなどあればいいなあと思います。
- ・誰もが参加しやすい事業。情報をもっと知りたい。音が苦手だったり、大勢の人が集まる場所が苦手な人もいるが、参加したい人が参加しやすい環境を作ってほしい。南部の人が参加しやすい場所で開催して欲しい。
- ・福祉施設で表現活動など何か始めようとする時に、管理職のスタッフの方の理解がないと難しいと思うので、現場のスタッフの方だけでなく、管理職のスタッフの方の研修的なプログラムなど行えたら良いのではと思いました。

## 2. 訪問調査

### 1) 奈良県立ろう学校 演劇部

#### 基本情報（施設情報）

- **所在地**：奈良県大和郡山市丹後庄町456 奈良県立ろう学校
- **種別**：特別支援学校（ろう学校）
- **在校生**：中学部（1年／2年／3年）—11名／10名／7名。計28名  
高等部（1年／2年／3年）— 8名／ 4名／7名。計19名 平成29年3月現在）
- **施設（学校）の沿革**：前身校の設立1920年。奈良県立ろう学校1969年。

#### 活動概要

- **活動名**：演劇部
- **活動内容**：手話と字幕を組み合わせたオリジナルのスタイルの演劇活動を行っている部活動。所属学生は中学部と高等部の学生。活動は毎週火曜日の放課後16：00～18：00。公演が近づくと土日に特別練習を行うこともある。全国高校生手話パフォーマンス甲子園の常勝校でもある。
- **活動の沿革**：部活動としての発足は14年前。その前身として、現在も同部活の顧問を勤めている綿井朋子先生が、20年ほど前から身体表現の活動を行っており、その後現在の部活動となった。
- **演劇部生徒数**：12名（中学部7名／高等部5名）。役者をしている生徒が11名。1名が制作スタッフ。なお奈良県立ろう学校では、体育会系の部活動と文科系の部活動、2つの部活動に所属するという方針を取っており、演劇部の部員はみな陸上部との掛け持ちだという。



演技をする部員たち



部員たちを指導する綿井先生

## 調査内容

- 調査日時：2018年2月13日（火）16：30～18：30
- 調査員：大井、後安、宮下

### 活動見学

- 参加部員：9名（欠席者2名）
- 場所：奈良県立ろう学校 体育館

#### • 内容：

調査時には3月の作品発表に向けての稽古を行っていた。体育館の中央に少し高くなったステージや、数個のイスなどが並べられ、簡単に舞台が作られており、その上で生徒たちが稽古を進めていく。稽古はいわゆる通し稽古で、作品の頭から順を追って生徒たちがシーンを演じていく。顧問、副顧問の先生や出番待ちの生徒が舞台の前方に向かって座り、稽古の進行を見守っている。

劇は全て手話で演じられているため、調査員にはその内容は分からないものの、生徒たちはセリフもすっかり覚えてしまっている様子で、生き生きと演技を続けていく。20分ほど稽古が続いたところで、一旦タイムが取られ、顧問からのダメ出しが入る。ダメ出しの中では、手話の表現や身体の動きに関しての注意を中心に指導がなされていた（ex.手話が早くて何を言っているのか伝わらない。この登場人物の心情を考えるともっとこう動けるのではないか、等）。ダメ出しを受ける生徒も積極的で、先生の指示を聞いてすぐその場で演技を試してみたり、先生に質問を投げかける生徒もいた。また、生徒同士でも演技について話し合う姿が見られた。

10分ほどダメ出しが続いた後、先程中断した箇所の前場面から稽古が再開される。ここからは、何か改善点がある度に先生がストップをかけ、小返しをしながらの稽古になる。この稽古で特に印象に残ったのは、顧問が、まだ演技に慣れていない中学部の生徒に演技を伝える際に、高等部の先輩の女子に「アドリブでいいからちょっと代わりにやってみてくれる？」と声を掛け、お手本の演技を行わせていた場面だ。先輩の女子（後の聞き取りによると彼女は高等部の3年生で、演劇部に入って5年目のベテランだということ）は流石の演技力でわがままな子供役を演じ、後輩もその演技を見つめていた。10分ほど返し稽古をした後、休憩。その後、1時間ほど稽古を行い活動は終了した。

### 聞き取り調査

- インタビュー対象者：綿井朋子先生（奈良県立ろう学校 美術教員、演劇部顧問）

#### Q.綿井先生の経歴、部活動の沿革について

- 綿井先生が演劇に興味をもったのは奈良ろう学校に来てから。色々なろう者の文化に触れ、芝居を見たりするうちに興味が高まり、「生徒たちと一緒にやってみたらどうなるかな」と思うようになった。
- そういった思いから、20年近く前、身体表現的なパフォーマンスを、授業のなかや、有志で集まった生徒とやり始めた。
- そこで体験した生徒が中心になって、県の高校演劇の発表会に賛助出演したことがきっかけとなり、段々と外に発信していくようになった。そして、そこに参加していた生徒たちから「演劇部を作ろう」という声が上がリ、部活動を創設することになった。立ち上げ時から今年度まで、顧問を続けて14年目になる。

## Q.演劇のスタイルについて

- 作品を上演する際には、手話での演技に字幕、音響、照明をつけて上演している。
- 部活動を始めた頃は字幕を付けず、生徒に声を出させていた。しかし、やはり日本語と手話では言語が違うので、声で（手話と一緒に）表現することには限界がある。生徒にとっては、手話という（身体表現を用いた）言語が感情を豊かに表現するのに一番有効だ、と思うようになり、今の声を出さないスタイルになった。
- また、これは健常者の舞台にも言えることだが、声を出すと声に（表現を）頼ってしまい、相手を見なくなったり、動かなくなったりしてしまう。手話という言語は、基本的に見ないと成立しないものであり、その身体表現から言葉のキャッチボールが生まれるので、ろう学校の子供たちと活動するのであればこの方法しかないと考えている。
- ただし、この演劇を健常者に分かってもらおうと思うと、どうしても字幕が必要になるので、字幕をつけて上演している。ただし、もちろん字幕が全てではなく、生の演技が伝わるのが1番だと思っている。
- シナリオは、自分（綿井先生）で書いたり、既成作品を作り直したりしている。
- 部活動を長く続けていくなかで、過去に全国大会に選ばれた作品や、プロの作家の作品を使えるようになってきた。このように、活動のなかで積み上がってきたものがあると感じている。
- 今日からは体育館を使って、実際の演技の稽古を始めたが、それまでは、教室でまずはしっかり手話練習をして、身体にセリフを入れていく練習をしてきた。
- セリフを覚えるにしても、座って読み合わせしているだけだと、セリフは覚えられない。身体を動かしながら、基本的な演出を付けながら1カ月くらいかけて自然に言葉が入るようにしていき、残りの1カ月は体育館で、本当の舞台の大きさに合わせて、稽古をつけていく。
- (配役について) 基本的には綿井先生が「この子にはこれをやってほしい」、「この子をもっと変われそうだ」、「この子の持ち味をもっと出せそうだ」という希望も込めて決めている。それぞれの生徒に向けて当て書きをする時もある。

## Q.活動の狙い、目的に関して

- 演劇を通じて自己表現をしてほしいと思っている。自己否定感が強い子もいるので、みんなに認めてもらう経験をしてほしい。それがこの活動を始めたそもそもの大きな狙い。
- 仲間づくりも大切な要素の一つ。演劇は一人では出来ない活動なので、みんなと一緒に経験・共感をしながらつくっていくことを大切にしている。もちろんその中では喧嘩もするし、気まずくて稽古できない時もあるが、その度にきちんと話し合いをし、時間をかけて立て直している。
- 生徒は舞台を一回経験すると変わっていく。舞台の経験が自信になり、自己表現も変わっていく。人前で表現を見せるということは大きいと思う。

## Q.課題、今後の展望について

- まずは今の活動を継続していきたいと思っている。
- 部活動という特性上、生徒は毎年入れ替わっていくが、そのなかでも積み上がっていくものがあればいい、と思っている。
- また、やっとなんとなく奈良県でも私たちの活動を知ってもらえる機会が増えてきたとも思っている。より広く知ってもらうことにより、ろう者の理解に貢献できればと思っている。

## 2) 社会福祉法人 在友会 障がい者支援施設 フレンズまきば

### 基本情報（施設情報）

- **所在地**：奈良県北葛城郡上牧町大字上牧900番1
- **種別**：施設入所支援、生活介護事業、ショートステイ
- **利用者**：入所者50名、ショートステイ6名、生活介護60名
- **施設の沿革**：2004年2月、社会福祉法人在友会設立、同年4月、知的障がい者入所更生施設・短期入所フレンズまきばを開設。2009年7月、フレンズまきばを新体系に移行。

### 活動概要

- **活動名**：音楽療法
- **活動内容**：ミュージック・ケアという音楽療法の手法を用いた活動。鈴、鳴子などの小型楽器やフラップバルーンを使って体を動かしたり、歌を歌ったり合奏を行ったりする。
- **活動の沿革**：施設が開所して間もない2004年10月より、尾川久子先生による音楽療法が行われている。開始当初は入所者50名全員が広い部屋に集まり、月2回の実践が行われていたが、現在は、日中活動（6班構成）の各班から本人の意思を主とし、年齢層などに配慮した2つのグループに分け、それぞれ水曜日の午前中に月1回ずつ行われている。
- **活動の参加者**：フレンズまきばの生活介護利用者60名の中から、担当職員が、利用者本人の意思、年齢層や障がい特性等を踏まえ、日中活動の各班から1回あたり約10名の参加者を選んでいる。それに通所の利用者が少数加わる。参加者の氏名は事前に尾川先生に伝えている。
- **スタッフ**：講師の尾川先生、担当職員1名。音楽療法当日は、現場職員の中から2名が入り、順次交替する。すべての現場職員が音楽療法を経験できるよう配慮がなされている。



布を使った活動



バチを使った活動

## 調査内容

- 調査日時：2018年2月14日（水）10：00～12：30
- 調査員：中島、後安

---

### 活動見学

---

- 参加者：シニアクラスの12名
- 場所：フレンズまきば 食堂前のオープンスペース

- 内容：

講師の尾川先生の方針により、中島、後安ともに音楽療法に参加しながら見学を行った。

CDデッキから幅広いジャンルの曲を流しながら、それに合わせて身体を動かしていく。振り付けは、椅子に座って何も持たずに手や上半身を動かすもの、鳴子、鈴、などの小型楽器を曲に合わせて鳴らすもの、フラップバルーン（大型の布）などを用いて大きく運動するものなど、様々。身体全体を使って動く活動と、椅子に座ったままでできる活動とが交互にやってきて、参加者の注意集中を持続させやすい構成になっていると感じた。

曲と曲の間の時間に、参加者が移動したり楽器を配布、回収する場面が多かったが、参加者同士が助け合って活動する様子が見られた。

活動の途中、参加者の1人がCDデッキのストップボタンを何度も押した。先生はしばらく様子を見ていたのだが、活動に支障が出始めたので、注意してやめさせるような場面があった。

活動時間は準備や片づけの時間を除くと、10:15～11:15の正味1時間程度であった。

---

### 聞き取り調査

---

- インタビュー対象者：尾川久子先生（音楽療法チームアンダンテ、日本音楽療法学会認定音楽療法士）
- 同席者：吉川圭子さん、小野寺聡さん（フレンズまきば 支援員）

#### Q.音楽療法士になったきっかけ

- 尾川先生はご自身も障がいのある息子さんを育てており、その息子さんと一緒に色々な療育の場に参加しているうちにミュージック・ケアの存在を知り、興味を持った。
- 2000年に日本ミュージック・ケアの初級研修を受け、音楽療法の活動を始めた。今年で19年目。

#### Q.フレンズまきばでの音楽活動について

- 14年前、フレンズまきばが開設する際の説明会に参加した際、音楽療法士である旨をお伝えした。それがきっかけとなり、その年の10月から音楽療法を開始することになった。
- 現在はヤング、シニアと年齢層で2つのグループに分けて活動を行っている。障がいの程度では分けていない。障がい軽度の方と重度の方は、それぞれの役どころがある。軽度の方はその高い能力により活動を支え、重度の方の活動を助ける。重度の方は、その笑顔でグループ全体を明るくする、何かが出来た時の喜びを全員で分かち合うなど、ムードメーカーとして貢献できる。
- 普段は気難しく、コミュニケーションが難しい方が、音楽療法に参加すると笑顔になるなど、様々な変化がみられる。

**Q.音楽療法で使用している曲について**

- ミュージック・ケアのオリジナル曲、クラシック、尾川先生自身が振り付けを考えた曲など。

**Q.今後の課題や新たにやってみたいこと**

- 音楽療法以外にも施設の行事に関わってみたいと思っている。
- 3年前から、フレンズまきばのクリスマス会に関わるようになった。担当スタッフと一緒にプログラムを考え、参加している。

**Q.利用者が外に出かけ、音楽などの舞台芸術にふれる機会はあるか**

- (施設職員の小野寺さん) 外出する機会は、様々な形式により頻回に設けているが、音楽などの舞台芸術にふれる機会は現状として限られている。今後、利用者の生活の質を高める為にも、その様な機会も設け、興味や関心を広げていきたいと考えている。

**Q.尾川先生の活動について**

- 尾川先生は、フレンズまきば以外にも複数の施設や保育園などで音楽療法を行っている。

**Q.尾川先生の音楽療法に対する考え、力点を置いていること**

- 音楽は、人間の根源的、原始的な部分に響くので、音楽を感じる能力に障がいのあるなしはありません。どのように感じたかの表現ができないので、他の人には伝わりにくいというはあります。こういった目的の活動であれ、音楽的感性を刺激するようなアプローチの方法は、障がい児・者に対してとても有効だと思います。
- 知的障がい者に対する介護予防策をより考える必要があります。健常者と比べて、運動をされている方が少なかったり、同じ姿勢が多く日常で使う筋肉が限られていたり、身体が固かったり、早い時期からの介護予防の取り組みの必要を感じています。股関節、ひざ、足首の柔軟体操や太ももの筋肉をつける体操などを、難しい説明をせず、楽しいと感じられる範囲で行っています。介護予防的音楽療法の充実が、私が音楽療法を実践していく上での大きな課題の一つです。

### 3) 社会福祉法人 大和郡山育成福祉会 ひかり園

#### 基本情報（施設情報）

- **所在地**：奈良県大和郡山市矢田町字大谷382-2
- **種別**：生活介護事業、就労継続支援事業B型、就労移行支援事業
- **利用者数**：不明
- **施設（学校）の沿革**：1993年9月、社会福祉法人大和郡山育成福祉会福祉会設立。1994年4月、ひかり園開所。

#### 活動概要

- **活動名**：ひかり園音楽隊
- **活動内容**：松本先生によるレッスンは、毎週水曜13：00～15：00に開かれている。おもに合唱の練習。毎年7月におこなわれるひかり園主催の輝（ひかり）コンサートがメインとなる発表会で、松本先生は、企画・構成・司会・マリンバを担当している。それ以外の時期にも外部の発表会に積極的に参加している。毎回レッスン後に、講師と施設職員と有志の利用者で「反省会」が開かれる。この「反省会」の語らいの時間も非常に大切にされている。
- **活動の沿革**：ひかり園が開所した1994年より、松本松本先生の音楽指導が始まり、現在にいたる。
- **活動の参加者**：ひかり園の利用者
- **講師**：講師の松本真理子さんとお弟子さん2人の三人組でレッスンを行う。レッスンには施設職員が1名付き添う。



松本先生の指導を受けるメンバーたち



歌の振り付けにあわせて踊るメンバーたち

## 調査内容

- 調査日時：2018年2月14日（水）14：00～16：10
- 調査員：中島、後安

### 活動見学

- 参加者数：約26名（途中退出、途中入場など、数名の出入りがあったため、正確な人数は不明）
- 場所：ひかり園 ピアノ室

#### • 内容：

私たちがひかり園に到着すると駐車場まで大きな歌声が届いていた。部屋に通されると、歓迎の歌で迎えてもらった。

この日はピアノ担当の方が欠席のため、普段は指揮をおこなう松本先生が、ピアノをひいて、指示も出しながらレッスンを行っていた。

松本先生は、稽古場を縦横無尽に動き回り、からだ全体で指示を飛ばしていた。参加メンバーも松本先生の指示にめいっぱい応えようと、大きな歌声を出し、稽古に集中している感じだった。とはいえ、メンバー全員一丸となって一糸乱れず、ということでもなく、ずっと端っこに座って稽古の様子を見ている女性や、気の向くままに動いている男性もいた。稽古の途中に退室しても無理に部屋に戻ってきてもらうようなことはなく、参加メンバーの行動の自由度は高かった。

私たちが到着してから、練習したのは2曲だった。松本先生の指示のポイントは、歌詞を流して歌うのではなく、大事なフレーズの頭の部分に、声だけでなく全身のエネルギーを集中させ、メリハリをつけさせようとするところにあった。「ありがとう」の「あ」や、「パッション」の「パ」など。まるで踊るかのよう「パッ」と何度も全身で表現されていた。メンバーがわかりづらそうな様子をしている時は、松本先生が言葉や身振りを少しずつ変えながら、繰り返し指導していた。松本先生の言葉を受け取ったメンバーは、自分なりにもっとよい歌い方をしようと、いろいろな歌い方を試すなど、松本先生とメンバーの真剣なやりとりが続いた。

稽古の終盤で、参加メンバーが自己紹介をする時間があった。好きな歌を歌ったりなどし、不思議な盛り上がりを見せて、稽古は終わった。稽古がいったん終わった後、「なんか今、言っておきたいことある？」とメンバーに松本先生が問いかけ、おもむろに調査員の中島にマイクを渡した。そこで中島が「何か難しいことはありますか？」と近くにいる人たちに聞いていく場面も作られた。

練習時間は午後1時から3時。私たちは2時過ぎから約50分見学させていただいた。

### 聞き取り調査

- インタビュー対象者：松本真理子先生（マリimba奏者）、中橋寛隆さん（助手）
- 同席者：練習に参加した音楽隊メンバー5名（有志）、河野真澄さん（生活介護事業サービス管理責任者主任支援員）、犬伏未乃莉さん（支援員）
- 稽古のあとは、スタッフだけでなく音楽隊メンバーもまじえて反省会が毎回開かれていて、メンバーさんはここでの語らいもとても楽しみにしているようだった。
- 聞き取り調査に先立っては1分間スピーチという形で、簡単に自己紹介の時間がとられた。調査員である私たちは、調査の趣旨と練習の感想を一言述べるよう求められた。松本先生いわく、こういうふうスピーチを求めるのは、言葉をしゃべる、簡潔に自分の意志を伝える機会をことあるごとに持ちたいからだそうである。特にメンバーにとってはその機会は重要だと思う、とのことであった。

### Q.松本先生から音楽隊メンバーへの質問「今日注意されたことで印象に残っていることは？」

- 音楽隊リーダー格のAさんは、「飛び出すな」という指示が印象に残ったという。「そうそう、みんなをリードしようとして早く出ちゃうところは直さないといけない」と松本先生は答えた。
- ※この後、メンバーが退出され、あらためて聞き取りの時間をとっていただいた。

### Q.活動の経緯やねらいについて

- 松本先生とひかり園とのお付き合いは、開所式のときにマリimbaを弾いた時から始まり、かれこれ24年になるという。
- 最初は、「おもちゃのちゃちゃちゃ」とか「ドラえもん」といった曲を歌おうと考えていたが、ある時スタッフの方から「この人たちは大人なんです」と言われて、ああ、失礼なことをしたなあと反省した事がある。
- ひかり園音楽隊の活動は「あの人ががんばってはるなあ」だけで終わりたくないと思っている。言葉を伝えたい、はっきり伝えたい。レッスンのなかでありがとうの「あ」やパッションの「パ」を大事にしていたのはそういった思いから。
- この活動は、自分ひとりでは決してできない。ピアノと助手さんの3人体制でまわしている。

### Q.活動全般について

- 水曜の稽古を音楽隊のメンバーも施設のスタッフさんも、みんな待ってくださっている。施設のみなさんとは信頼関係で結ばれていると感じている。音楽をする前提として、この信頼関係はなくてはならないもの。
- ちょうど1年くらい前から別の福祉施設でも活動を始めた。そこのメンバーとひかり園音楽隊のメンバーを交換するなど、交流をしたいと思っている。
- 稽古で大事にしていることは、「気づき」、「手当て」、「見守り」。あの人、動いている。声が出てる、と気づくことがまず大事だと思っている。
- 今、声が出ていない人でも、いつかは出ると信じてやっている。
- ひかり園には、「有名人」がいっぱいいる。コンサートなどで積極的に外に出て、声をかけられるようになってもらいたい。

## 4) NPO法人 アゴラ音楽クラブ

### 基本情報（団体情報）

- **所在地**：奈良市富雄北1-12-4
- **種別**：認定NPO法人
- **団体概要**：障害のある人の音楽レッスン（ピアノ、マリンバ、和太鼓）を中心とした活動を行っている団体。また、音楽レッスンの他にも、ダンスレッスンや外部での演奏活動、音楽療法的視点からの研究活動等、幅広い活動を行っている。本調査では当団体の活動のうち、和太鼓の演奏チーム「アゴラ太鼓」の活動を取り上げる。
- **団体の沿革**：当NPOの代表を務める水野恵理子さんが、現在の活動場所で、1988年に音楽教室を開設。開設当初は一般的な音楽教室であったが、徐々に障害のある人との音楽活動に特化。その後、2012年にNPO化。

### 活動概要

- **活動名**：アゴラ太鼓
- **活動内容**：和太鼓の演奏を行うチーム。在籍メンバーは初級・一般クラス（4名）と応用クラス（9名）に分かれて活動を行っている。練習は毎週土曜日。アゴラ音楽クラブ主催の音楽会での発表のほか、依頼を受けての外部での演奏活動も行っている。
- **活動の沿革**：上記の音楽教室に通っていた1人の生徒が、太鼓を叩くことが好きだったため、1995年より太鼓の活動を開始した。
- **活動の参加者**：アゴラ音楽クラブに通う障害のある人13名。
- **講師**：基本的には水野さんが1人で指導を行っているが、月1回外部から専門の講師を招く。



大太鼓を叩くメンバーたち



桶胴太鼓を叩くメンバーたち

## 調査内容

- 調査日時：2月17日（土）15：00～17：30
- 調査員：中島、大井、後安

---

### 活動見学

---

- 参加人数：「応用クラス」のメンバー8名（及び、参加している生徒の保護者数名）
- 場所：富雄北小学校 プレイルーム

- 内容：

まず、初めに大太鼓と締太鼓の曲の練習が始まる。障害のあるメンバーのほとんどは大太鼓を叩いており、その他の障害のあるメンバー数人と保護者の人たちが、締太鼓を叩いている。また、講師の水野さんも生徒と一緒に大太鼓を叩いている。メンバーたちは練習している曲をもうほとんど暗記しているようで、合奏が大きく乱れることもなく、一曲を最後まで叩き終えた。叩き終えると、水野さんが全員に向けてダメ出しを行い、特に身体の動かし方に重点を置いた指導（ex.バチを振り上げる時は天井を突き刺すくらい勢い良くあげる等）を行っていた。その後、同曲の練習を、ところどころで止めて指導を行いながら、10分ほど続けた。

次に、大太鼓を片付け、桶胴太鼓と締太鼓の曲の練習が始まる。こちらは肩がけの桶胴太鼓を持ったメンバーたちが、練り歩いたり、ステップを踏んだりする曲だった。この曲は3月の音楽会でも演奏するらしく、みなで「本番ではどういうタイミングで動こうか」、「どう繰り返して終わろうか」と話し合いながら練習を行っていた。最後にその曲を頭から通して演奏し、16時頃に練習が終了。

太鼓は、練習会場である富雄北小学校からすぐ近くにある、アゴラ音楽クラブの事務所のあるマンションの倉庫に保管しているため、水野さんや保護者の車に太鼓を積み込み、みなでマンションまで移動。全ての太鼓を片付けて活動は終了した。

---

### 聞き取り調査

---

- インタビュー対象者：水野恵理子（日本音楽療法学会認定音楽療法士、認定NPO法人アゴラ音楽クラブ理事長、小田原短期大学特任准教授、近畿大学医学部付属病院音楽療法士）

#### Q.水野さんの経歴、アゴラ太鼓の沿革について

- 水野さんは幼少からピアノは習っていたが、特に音楽家になるつもりはなく、大学ではギリシャ哲学を専攻していた。しかし、ギリシャ哲学を学んでいると、音楽と人の魂、身体の関係について沢山論じられており、改めて音楽に興味を持つようになる。大学卒業後、1988年、奈良で音楽教室「スペースアゴラ」を開いた。
- 初めは普通の音楽教室を営んでいたが、ある時、たまたま自閉症の子供が通うようになった。その子供がとても感性的な子で、リズム感や和声感がすごかった。
- そして、障害のある生徒を受け入れているうちに、10名ほどの障害のある子供が集まるようになった。水野さんは障害のある子供達をととても面白いと感じていたため、健常の生徒たちは音楽教室の他の先生たちに任せ、自分は障害のある子供たちだけを担当するようになった。
- ある日、ピアノが苦手な障害のある生徒さんのお母さんがふと「この子、太鼓が好きなんですよ」と言ったので、太鼓を叩いてみたのが「アゴラ太鼓」のはじまり。
- 活動を始めた頃は資金もなく、太鼓の代わりに古タイヤを叩いていたりしたのだが、その後、様々な助成を受けたりし

て、楽器を少しずつ買い揃えていった。

- また、障害のある人との音楽活動を始めるにあたり、水野さんも障害のある人に興味を持つようになり、音楽療法を学び始めた。また、大学院に通い始め、障害のある人との音楽活動に関する研究活動も始めた。博士号を取得した後、実践活動と研究活動を並行して行っていくために、2012年にNPO法人アゴラ音楽クラブを立ち上げる。

### Q.活動の基本情報について

- 現在、和太鼓はAチーム（応用クラス）と、初心者チーム（初級・一般クラス）に別れ、計13名で活動をしている。新規メンバーも随時募集している。
- 現在、Aチームは最年少のメンバーが20歳。みな成人しているので、日頃は作業所で働いたりしながら週末に太鼓の練習に通っている。最年長は38歳くらい。
- 太鼓の楽曲は、水野さんが新しく作ったり、外部から指導に来る講師に作ってもらったり、また、既成の曲を演奏したりしている。
- （運営スタッフについて）水野さんの他、外部からの講師や、音楽教室の他の先生（マリimba、ピアノ、ダンス）、ボランティアさんに手伝ってもらいながら、活動を続けている。

### Q.活動の狙い、目的に関して

- 太鼓だけに限らず、アゴラ音楽クラブとして一番大切にしているのはコミュニケーション能力を育てること。太鼓の活動では集団で活動を行いながら社会性を向上させていってほしいと思っている。
- 参加している生徒たちはどんどん変わっていく。すごくおとなしかった生徒が人と積極的に話せるようになったり、メキメキと成長していく。

### Q.課題や今後の展望について

- 自由に練習できる場所がないのが現在の悩み。今は太鼓を置いておく場所も狭く、保管が大変になっている。太鼓が置いておけて、いつでも練習できる場所があれば理想だと思っている。
- 音楽教室の運営もしながら、太鼓の活動も行っているので、人材が足りないと思っている。
- 広報のできていなさにも課題を感じている。冊子やwebサイト等、様々な発信は試みているのだが、なかなか上手く伝えられていないように思う。
- これからの一つの課題として捉えているのはメンバーの高齢化。ダウン症のメンバーが多いこともあり、早期の老化が予想され、心配である。太鼓の活動を行うことによって、少しでも、老化を遅れさせたりする効果が見られたりしないだろうか、と考えている。
- （和太鼓ならではの魅力は何か、という質問に対して）手先の細かい作業や楽譜が要らないので、誰もが参加でき、また人と一緒に活動できることがいいところだと思っている。
- また、和太鼓は演奏の動作が大きく、ドン！と叩くだけでもかっこよく見えるので、参加者のモチベーションがあがる。小さい子どもから高齢者まで幅広い人々に受け入れられる。

## 5) 社会福祉法人 成美学寮 成美寮

### 基本情報（施設情報）

- **所在地**：奈良市柳生下町445
- **種別**：生活介護事業、施設入所支援
- **利用者数**：30名
- **施設の沿革**：1949年、柳生芳徳寺にて、精神薄弱児入所施設として「成美学寮」を開設。1958年、社会福祉法人成美学寮が認可される。2003年、知的障害者入所更生施設「成美寮」を開設、知的障害児施設「成美学寮」を併設施設とする。2011年、「成美学寮」を閉所、「成美寮」のみの運営となる。2012年、施設の種別が障害者支援施設（生活介護・入所施設支援）になり、現行の形になる。

### 活動概要

- **活動名**：施設のお祭りでの演劇、音楽等の出し物を行っている。
- **活動の内容**：毎年4月に行われる、施設のお祭り「花まつり」で、施設の利用者の保護者や、地域の人達に向け、オリジナルの演劇や音楽の出し物を披露している。
- **活動の沿革**：施設が児童福祉施設だった頃から続いている伝統的な出し物で、正確な年数はわからないものの、40年位は続けているだろうとのこと。
- **活動の参加者**：基本的に利用者は全員参加だが、それぞれ参加の度合いは異なる。
- **担当スタッフ数**：主担当のスタッフが2名いるが、活動は施設の全スタッフで行っている。



過去の演劇のために作った道具たちが保管されている



道具を紹介する西出さん、児玉さん

**調査内容** ※成美寮に関しては活動の見学はなく、担当者へのインタビュー調査のみを行った。

- 調査日時：2月20日（火）
- 調査員：大井、後安、たけうち

### 聞き取り調査

- **インタビュー対象者**：橋本靖史（成美寮副施設長）、児玉さん（職員）、西出さん（職員：今年の活動の主担当スタッフ）、大東さん（職員：今年の活動の主担当スタッフ）

#### Q.活動の沿革について

- 4月に開かれる施設のお祭り「花まつり」において、保護者や地域の方に向けて、劇をはじめとした出し物をしている。
- 出し物の活動は成美寮が児童施設だった頃から続いており、正確な年数は分からないものの、私（児玉さん）が30年ほど前、成美寮で勤め始めたときにはすでに行われていた。恐らくは40年ほどになるのではないかと。

#### Q.活動の内容について

- 利用者が30名おり、それぞれに障害も異なるため、全員で一緒に出し物を行うことは難しいので、2つのグループに分かれて、それぞれ違う出し物を用意している。
- 今年は、1チームは劇を、もう1チームは音楽を使った劇のような出し物を予定している。
- 台本の制作や劇の指導は施設のスタッフが行っている
- 劇の内容は、誰もが知っている日本昔ばなしやアンデルセン童話をもとに、それらをパロディにした、笑いを取れるようなオリジナル台本を作っている。題材自体は利用者と相談した上で決定している。
- 出し物をする利用者さんたちも、お客さんに笑ってほしいと思っているので、本番だけ突然アドリブを入れてきたりする。
- 他にも、練習ではセリフを覚えられていなかった利用者さんが本番だけセリフを言えたり、練習には来ていなかった利用者さんが本番に突然飛び入りで参加して来たり、と、そういったハプニングも楽しく見られるような出し物を心がけている。
- （練習について）例年、2月頃から準備を始める。台本の決定や演技の練習だけでなく、カツラのような小道具も、職員と利用者と一緒に作っている。
- 利用者のみなさんには、花まつりでの発表が一年間の生活リズムの中に入っているため、毎年、この時期になると「今年は何やるん？」といった声が上がっている。
- （参加者について）一応、施設の利用者は全員参加という風にはしているのだが、練習に参加せずにその場にいるだけの人がいったり、中には練習に来ない人もいたりする。そういった多様な参加の仕方を認めている。
- （運営について）それぞれの出し物に対して1人ずつ主担当のスタッフがいるが、職員全体でも2つの出し物の担当に別れ、施設全体で協力しながら企画や運営を行っている。
- 主担当のスタッフは毎年持ち回りでやっているが、今年の2人に関しては去年から引き継いでやっている。
- 私（西出さん。音楽チームの担当スタッフ）は、去年の経験を経て、やりたいことがあったので自分から立候補した。

## Q.今年の内容について

- (音楽チームについて、西出さんより) 「音楽の広場」というテーマのもと、春夏秋冬に合わせ、みんなに馴染みのあるような歌謡曲を、少し演出をつけて歌う、というような内容を考えている。
- なかなか言葉を発さない利用者にも、職員がいつも横で一緒に歌い、段々と歌を覚えてもらうなど、少しでも皆が参加できるような工夫を行っている。
- (劇チームについて、大東さんより) こちらのチームは比較的軽度な利用者が多く、多少のセリフであれば覚えられる人もいたので、童話をもとにしたお芝居をしようと思っている。

## Q.活動の変遷について

- 特に利用者が子供だった頃(児童福祉施設だった頃)は、子供が「どこまでできるようになったかを見せる」ことが目標だったので、職員が利用者を指導するような側面が強かったが、今は皆さん大人になったので、みんなで楽しくやることを大切にしている。

## Q.活動の狙いに関して

- 保護者の方に1年間の成果を見せる、ということと、地域との交流の場をつくるというところを目的に活動を続けてきている。
- (劇をする時の)利用者の中にはやはり認めてほしい、という気持ちがある様に思う。発表の場は保護者や外部の人が来てくれる時でもあり、そういった人たちから激励されることが、毎年の意欲につながっているのではないと思う。
- 成美寮としては、生活発表の場を、施設のことを外部に知ってもらう場、利用者が自己表現をする場、として考えている。

## Q.課題、今後の展望について

- 近年は障害の重度化に伴い劇をやりたがる利用者も減ってきており、積極的にやりたがっているとそうでもない人がいる。ただ、できる限りは出し物を続けていきたいと思っている。全員参加ではなく、希望者のみの参加にする、というようなやり方もあるかもしれない。

## Q.その他

- (劇を通じて、利用者に変化は見られるかという質問に対して)特に子供の頃は出し物が一つの節目になっていて、それをきっかけに前向きになれたり、と大きく成長する人がいた。
- (地域のなかで活動が根付いているか、という質問に対して)昔(児童福祉施設だった頃)は、利用者が施設から地域の学校に通学していたので、自然と地域との繋がりが生まれていたが、今はそういった交流も減っているので、利用者が地域の催しに参加したり、地域の人が施設に来たり、という場が、地域との接点づくりになっていると感じている。
- (出し物を続ける職員の意識はどうか、という質問に対して)自分(大東さん)がこの施設に勤め始めた頃は、やはり仕事としてやっている気持ちがあったのだが、やってみると、利用者のこれまで見たことのない一面が見えたりして、楽しいと思った。こういった行事を一緒に経験すると、職員と利用者の信頼関係は深まる。本番までの準備を一緒に頑張っていく、という過程が大切。

## 6) 一般社団法人無限 放課後等デイサービス ワンピース

## 基本情報（施設情報）

- 所在地：奈良県生駒市小平尾町57-1
- 種別：放課後等デイサービス

## 活動概要

- 活動名：ダンス教室
- 活動内容：講師の専門はストリートジャズだが、ヒップホップ、レゲエ、ロックダンス、など、様々なダンスの要素を取り入れながら、児童たちにダンスを教えている。発達障害などのある児童のクラスは、第1、3週の15：45～17：15に開講。知的障害などのある児童のクラスは、第2、4週の15：00～17：00に開講。
- 活動の沿革：2年前より、放課後等デイサービスが終わった後の部活動のような位置づけで、参加者を募って始まった。最初は、支援学校に通う知的障害などのある児童を対象に隔週でおこなっていた。好評のため、新たに隔週で、地域の学校に通う発達障害のある軽度の児童を対象にしたクラスも開講した。
- 活動の参加者：知的障害などのあるクラス4名（小学校6年生1名／中学校2年生3名）、発達障害などのあるクラス9名（小学校2年生～中学校3年生）。
- 講師：1名（サポートとしてスタッフが1～2名参加）



「リズムとり」の様子



ダンスの様子

## 調査内容

- 調査日時：2018年2月24日（火）15：00～18：15
- 調査員：文（NPO法人ダンスボックス事務局長）、中島、後安

---

### 活動見学

---

- 参加児童：3名（欠席者1名）
- 教員：2名（顧問1、副顧問1）
- 場所：一般社団法人無限 放課後等デイサービス ワンピース

- 内容：

練習は、以下のような全体の流れを、ホワイトボードにマグネット板で視覚的に示し、ひとつの課題が終わると、その都度をはがしていく、というような方法で進められていった。

ストレッチ

じゅうなん

きんトレ

きゅうけい

きそれん

- アイソレーション

- リズムとり

きゅうけい

ダンス

クールダウン

おわりのあいさつ

稽古では、ストレッチ、じゅうなん、きんトレまで続けて行い（約15分）、休憩。休憩時間中も先生のまわりから離れず、とても仲の良いクラスであった。

「リズムとり」では、まず課題曲を聞く時間を持ち、曲を構成しているさまざまな音を探していた。「たっ、たっ、たっ、たた、はどこにある？」「あった！ 3回くらいあった！」といったように、曲のビートを感じられるよう、繰り返し聞いていく。その後、曲にあわせてひざを曲げ伸ばしし音楽にのせて動く。

短い休憩をはさみダンスへ。施設のお祭り「infinity festa」で発表する曲“Say Yes”の振り付けを確認しながら進んでいった。曲の途中には、振り付けのない、自由に踊る部分があり、参加者は思い思いの動きを披露していた。立ち位置については、ホワイトボードにフォーメーションを書いて説明したり、床の上にテープを貼って、動線をわかりやすくするなど、言葉と視覚によって参加者の理解を促していた。

最後は、ゆったりとした音楽をかけながら、身体を動かし、クールダウン。今日やったことを簡単に振り返り、終了した。活動時間は1時間半ほどであった。

---

**聞き取り調査**


---

- **インタビュー対象者**：参加者（小学校6年生と中学2年生）の保護者2名、眞下由美子さん（ダンス講師、支援員）、竹下綾乃さん、阪上典子さん（支援員）

**Q.このダンスのプログラムがはじまってから、現在に至るまで【眞下先生】**

- もともと無限のスタッフとして勤務していた。ダンスはずっと続けていて、ある時無限のなかでもダンスをやってみないかということで声をかけてもらった。
- 今は1時間半のレッスン中みんな集中しているが、当初は全然様子が違っていった。なかなか静かにならず、今何をする時間なのか、意識できていないようだった。今では、今日行っていたように、「自由に踊る」という時間をとって、みんな楽しめるくらい、積極的な参加が見られるようになった。
- 自分としては、最近JDAC（一般社団法人ダンス教育連盟）で資格をとったことで、ダンスのことにくわえて、身体について理論的に学ぶこともできたので、より自信をもって取り組むことができているように感じる。

**Q.活動で工夫していること【眞下先生】**

- JDACではアイソレーションの教え方や、視覚支援の方法などを学んだ。今も、ステップアップに向けて、ダンスの勉強をしている。やはり、言葉による説明だけでなく、ホワイトボードに書いたりすることで、視覚的に説明することが有効。
- 立ち位置を確認するための目印のテープも部分的に貼るのではなく、感覚が続くように、途切れず動線を示すようにしている。慣れていくと、順番にはずしていけるのも良い。
- 今のやり方になったのは、参加している子どもたちに育てられた部分も大きい。色々なことを試しながら、これは分かるんだ、これはちょっと難しいんだと、データを集めて、ようやく今がある。

**Q.今日はじめて活動の様子を見て【保護者】**

- 人に合わせるのが苦手で、他の子よりもワンテンポもツーテンポも早くでてしまうタイプだったが、ダンスに参加して「見て真似る」ということを教えてもらったからなのか、人と合わせることができるようになった。苦手意識があって、できないと思っていたものも、ダンスをとおして「できる」ということを感じられるようになった。
- 家ではいつも自己流で踊っている。教えてもらって踊るのは苦手だと思っていたが、今日の様子を見て、ちゃんと教わってやれているのだなと思った。

**Q.発表の機会について【眞下先生、竹下さん】**

- 今は「infinity festa」でダンスを発表しており、やはり1年に1回、大きな発表会があるというのがとても大事。子どもたちの意識が全く違う。
- より広く発表の機会をもっていきたいと思っているが、一方で慎重に段階を踏んでいきたいとも思っている。よく知った人のなかで発表をしていると、好意的に見てもらえることがほとんどだが、多くの人に見てもらったことになった場合、そうでないケースもある。失敗する経験もちろん必要だが、大きな失敗ではなく、小さな失敗を重ねられるよう、ステップを踏んでいければ。

#### **Q.施設としてこのダンスの時間をどう見ているか【竹下さん】**

- まず、放課後等デイサービスでは、それぞれの支援員の強みを活かしたいと考えている。また職員同士も刺激を与え合うような関係になっていて、眞下さんの活躍に触発されて、プールの指導員の資格をとりにいった支援員もいる。みんな資格をとることで、もともと得意だったことをより深く学んでいる。
- 重度の障害のある人の場合、学校には部活のようなものがないので、ここでできればと思っている。
- いろいろな境遇にあるお子さんもいて、早く自宅に帰るよりも、ここでしばらく預かるということが重要な意味を持つお子さんもある。ただ預かるだけでなくその時間を楽しく活動できたらと思う。

#### **Q.今後やりたいこと【眞下先生】**

- 外のステージに立って、お客さんに見てもらいたい。
- 自分のダンスはストリートジャズがメインだが、このダンスの時間では、ヒップホップ、レゲエ、ロックダンスなど、様々なものをやっている。そのなかで、私はこれが合う、これが好き、というようなものに出会ってほしい。
- みんな、ワンピースにずっと通いつづけるわけではないので、もし他のダンススタジオに通いたいとなったときに、選択肢が多くあればいいと思っている。

## 7) 劇団くらっぴ

### 基本情報（調査した活動の情報）

- 稽古場所：奈良市三条大路2-520-3 株式会社ヒューマンヘリテージ内
- 種別：劇団
- 劇団員：5名（20代～40代。男性2名、女性3名）
- 講師：演出家1名
- 活動内容：毎週土曜14：30～16：30に稽古を行っている。劇団員は有志の障害のある人たちで構成されている。およそ1年に1回のペースで作品を発表している。
- 団体・活動の沿革：2004年、奈良市の福祉施設、たんぼぼの家のデイサービスプログラムのひとつとして企画されていた演劇ワークショップ的な活動がきっかけとなり、演出家、もりながまことが知的ハンディのある人たちと演劇をつくり始める。その後、正式にたんぼぼの家の活動プログラムのひとつとなり、公演を重ねるようになる。2012年より、劇団として独立する。



演技をする団員たち



演出のもりながさんが稽古を見守る

## 調査内容

- 調査日時：2018年3月10日（土）14：30～16：30
- 調査員：たけうち、後安

---

### 活動見学

---

- 参加者数：5名
- 場所：株式会社ヒューマンヘリテージ内の一室

- 内容：

団員が集まり、練習の準備が揃うと、「そろそろはじめよか」という演出家のもりなが氏の声かけのもとストレッチが始まった。もりなが氏によると、このストレッチは練習をはじめめるための儀式のようなものだという。そのあとも、儀式として女性劇団員が女子トイレに行く時間が設けられていた。その後、全員が戻ったところを見計らって、「じゃあそこに座ってみて」とおもむろに稽古が始まる。

現在取り組んでいる作品はプラトンの「饗宴」で、神々と人間たちが出てくる舞台だった。本作品では、劇団員5名のうちもっとも言葉の出にくい女性団員がゼウス神役としてずっと椅子に座り、他の出演者の様子を見ている、という構造をしていた。その人以外は、神様役と人間役の男女ペア2人ずつの配役であった。

この日の稽古は、ゼウスと他の神様役の男性の2人が椅子に座り、人間役の女性に対して「出てけ、ここは神様の座る場所や」と追い出すシーンから始まった。もりなが氏は、人間役の女性団員に対して、「『向こう行け』言われたら、壁にこうしてみ」、「机の下にもぐって、（神様の）足をつかんでみ」と動きを提案していた。

次に、もう1人の神様役の女性が登場し、神様役の男性に対して説教を始めるシーンの稽古に移った。その次は、人間役の男女ペアが出てきて、神様役の女性から、矢継ぎ早に詰問されるシーンの稽古に移った。詰問内容は、人間役の男性が実際に普段の生活のなかで巻き起こす「問題行動」のようで、「なぜそんなことをするのですか？」と問うと、「やりたいからや！」と人間役の男性が逆ギレし、「そんなことをしていいのですか？」と人間役の女性に問うと、「バツ！」と答えるという、まるでコントのようなシーンが展開されるものであった。これ以降も次々にシーンが展開していき、ぬいぐるみやペットボトルの蓋など様々な小道具も導入された。

稽古のなかで印象に残ったのは、セリフを忘れた団員に対して、他の団員が耳打ちしてセリフを教えたところ、演出家はその耳打ちした団員を注意した場面であった。演出家は「優しさから出ていることは分かるが、本番ではそれ（セリフを教えること）をしないでほしい」と言い、正解があってそれをなぞるのではなく、その場で出てきた言葉をその場でつないで、芝居を作っていってほしいという演出意図からの注意であった。

16時過ぎには稽古は終了し、お茶とお菓子を出して、おしゃべりをしながら振り返りを行った。

---

### 聞き取り調査

---

- インタビュー対象者：もりながまこと（演出家）

#### Q.作品づくりにあたって気をつけていること

- みんな何も見ないで次から次へたくさんセリフをしゃべっているが、もともと台本があったわけではなく、稽古のなかでみんなの口から出てきた言葉を定着させていったものである。
- 1つの作品を繰り返すすぎるとみんな飽きてしまう。でも、繰り返しをしなすぎると忘れてしまう。その見極めが稽古場では非常に大切になってくる。

- 自分が欲張ってしまっているな、という反省がある。特に1人の団員は、セリフを入れすぎて（頭が）パンパンになっているように感じられる。
- 障害のある人の日常は、ほとんどが許可制になっていると思う。これをしてもいいですか？あれをしてもいいですか？と常に周りに問いかけて許可をもらってからでないと、動き出すことができない。くらっぶの演劇活動では、ここからいかに自由になるかということを大切にしている。
- くらっぶを立ち上げた時から在籍しているメンバーが多いため、マンネリ化してしまうこともある。ある女性の団員2人は、並べるととてもいい雰囲気なので、よくこの2人をペアにして芝居を作ったが、どうもマンネリ化してきてしまったので、今回は敢えて、それぞれ別の人とペアを組むことにした。
- 配役は一方向的に演出側が決めるのではなく、なんとなく稽古のなかで決まっていく。
- ただ、本番前に実はこの役が嫌だったと告白されることもあり、だったら早く言ってくれよとも思うのだが（笑）。ただ、言い出せない空気を作った責任は自分にもあると思うので、そこは反省する。
- 作品を作っていると、結局、全部「チョイス」だなと思う。関係性や、言葉が出てきた時に、それだ！面白い！ってなる。それが相手に伝わると、場面やセリフとして定着する。
- 過去には前もって「ここはこう動いてほしい」というような段取りをつくって動いてもらったこともあるが、その時は見事に失敗してしまった。これは僕が悪い。設定の仕方がどこか間違っていたのだと思う。

### Q.劇団のマネジメントについて

- （活動費用に関して）それぞれの団員が月々3000円ずつ積み立てていって、稽古場の使用料や公演の費用にあてている。
- お金のことを含め、マネジメントはすべて団員のお母さんたちがやってくれる。劇団の代表も、あるお母さんが立候補してなってくれた。これはこの活動の価値を共有しているからできることだと思う。

### Q.今後の課題について

- 今は年に1回公演をしていて、公演にかかる費用は積立金のなかから捻出しているが、できたらもっと依頼されて、お客さんからもお金を取れる舞台にしていきたい。団員にギャラを払えるくらいに。
- 新しいメンバーも入って欲しいと思っている。スタッフも募集中。今は懇意にしている専門家に照明をもらったり、団員の1人に衣装作りをやってもらったりしているが、手伝いたいという人にもっと入ってきてもらいたい。

## 奈良県における障害のある人の舞台芸術活動に関する調査

発行日：2018年3月31日

発行元：一般財団法人たんぼの家

〒630-8044 奈良市六条西3-25-4

Tel 0742-43-7055 Fax 0742-49-5501

Email artsoudan@popo.or.jp

URL <http://artsoudan.tanpoponoye.org/>

\*本書は「平成29年度 障害者芸術文化活動普及支援事業」（厚生労働省）の一環として制作しました。



障害とアートの相談室

Email artsoudan@popo.or.jp

URL <http://artsoudan.tanpoponoye.org/>

一般財団法人たんぽぽの家

〒630-8044 奈良市六条西 3-25-4

Tel. 0742-43-7055 Fax.0742-49-5501

E-mail [artsoudan@popo.or.jp](mailto:artsoudan@popo.or.jp)

<http://artsoudan.tanpoponoye.org>

平成 29 年度 障害者芸術文化活動普及支援事業（厚生労働省）

